
Colorful

さわうみ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Colorful

【Nコード】

N63080

【作者名】

さわうみ

【あらすじ】

人の感情や意図を色として読み取ることができる青山智也。その能力のためにしてきた苦勞は数知れず。同性に恋してしまうセクシャルマイノリティということもあり、孤独を感じて生きてきた23年間だった。そんなある日、名ばかりの恋人から無碍にされ落ち込んでいた智也の前に黒川という男が現れる。智也と同じ能力を有し、その力を自由自在に操れる黒川は「おまえを探していた。俺のそばにいる。」と言い出して・・・。

prologue

3コーナーを過ぎたあたりから、それまで並んで疾走していた馬たちがまばらになっていくと同時に、観客席からの歓声が高まっていく。

あおやまとまかせ

青山 智也の横で馬券を握りしめて立ち上がっている男も例外ではなく、恋人の存在など無視してレースに釘付けになっていた。それ以前に、男が智也を恋人と認識しているかどうかは別の話だが。

男とは反対に、智也はレース場ではなく高揚した顔で「いけ！ そのままいけ！」などと声を張り上げている恋人を見つめていた。レースが終わったら一緒に食事に行けるだろうか、今夜は一緒に過ごせるのだろうか、と考えながら。

智也は競馬に詳しくないのでよくはわからないが、今日のレースは秋の天皇賞という大きなものらしく、だだっ広い競馬場の観客席は人で埋め尽くされていた。競争馬たちが4コーナーをまわり、さらに歓声が響き渡る。智也はあまりの熱気と色の洪水に溺れそうになって、一瞬めまいがして目を瞑った。次に目を開けた瞬間、恋人が「おおおお」と雄叫びを上げながら、智也を抱きしめていた。

「ジュン。ど、どうしたの」

「トモ、すげえ！ マジで当たったぜ！ 信じられねー！ おまえ、やっぱり神だわー！」

秋も深まり肌寒い陽気になってきたというのに、大きく胸元を開いたシャツから肌を晒しているジュンに羽交い絞めにされる。太いチーンネックスレスを2本も重ねてつけているので、それが頬に当たって痛かった。

「よかったね。えっと、けっこう当たったの？」

「とても大きな声じゃ言えねえが、万馬券だ。がっぽりもうけさせてもらったぜ」

智也の好きな低い声が耳元で響いた。そのままジュンに肩を抱か

れて観客席を後にする。窓口で換金手続きをしているジユンを少し離れたところから見つめていたが、帯のついた札束を3つ受け取っているのがわかった。口の端を釣り上げて智也のもとに戻ってきたジユンは素早く智也の着ていたコットンジャケットのポケットに何かを突っ込んだ。

「んじゃ、俺、これから仕事だから。また電話するわ！　じゃあな！」

「え、ジユン！」

「んだよ。礼ならポケットに入れたよ。それでうまいもんでも食ってくれよ」

「そうじゃなくて。食事する時間も、もうないの？」

「……ねえな。仕事なんだよ。悪い、急いでっからさ」

ジユンが紫色に包まれて見える。嘘をついている証拠。でも、追求することはしない。傷つくのは自分だとわかつているから。

「うん。仕事じゃ、仕方ないよね。連絡待ってる。」

「おう。じゃあ、またな！」

ジユンはそういうと、もう振り返りもせずタクシーに乗り込み消えてしまった。取り残された智也はポケットの中身を確認すると握り丸められた1万円札が2枚出てきた。

お金なんて別に欲しくなかった。それよりも、一緒に夕飯を食べ、そのあと映画を見たりできるほうがずっとよかった。そんなことはジユンは望んでいないということは「見えて」いるけれど。

疲れた。早く帰ろう。智也は重い溜息と共に歩き出した。気分が落ち込んでいる時は危険だ。色の洪水に飲み込まれてしまう。この感覚は、普通の人にはわからないかもしれない。そもそも普通ってなんだろう。智也だって超能力者でもなければ魔法使いでもないごく一般的な人間である。ただ、人より少しだけ「感じ取る」ことに敏感なだけ。ジユンが当てた馬券は、競馬などにまったく関心も経験もない智也が目星をつけた馬である。

智也は生命の宿るものの感情やエネルギーを色として読みとるこ

とができた。これを超能力と呼ぶ人がいるかもしれないが、智也はそうは思わない。予知や念力と違って、色を読むだけで何かが変えられるものではないからだ。先ほどのレースだって、勝ち馬を予知したのではない。多くの出走馬たちの中からいちばん光り輝く色を放っている馬を教えただけなのだ。いくらエネルギーに満ち溢れていても、世の中には運というものが存在していて、必ずしもエネルギーの大小だけで物事は結論づけられないのだ。たまたま、今回は色と結果が一致しただけの話。

「ちよつと、君」

ぼんやりと歩いている時に、急に肩を掴まれたので心臓が跳ね上がった。振り返ると見知らぬ男が智也に微笑みかけている。

「少し話がしたいんだが……ひどく疲れてるな。静かになれるところへ行かないか」

とつさに智也の表情と身体がこわばる。先ほどのジュンとの一部始終を見られてゲイとばれたのだろうか。だとして、それで声をかけてくるということはこの男も同士で、ナンパということなのか。

「いや、違う。あ、違うないけど」

「え……」

言葉に出していないはずなのに、男が意味不明ながらも反応したことに智也は驚きを隠せなかった。

「怪しいものじゃないから。今はこれしかないけど、はい」

男が差し出したのは免許証。黒川基くろかわもと、生年月日を見ると智也よりも7歳年上ということがわかった。でも、これだけでは不審情報などとはわからない。

「……色が見えすぎて疲れてるんだろ。違うか」

智也は男の発した一言に息をのんだ。

黒川を全面的に信用したわけではないが、彼の発した一言は聞き捨てならなかった。何故、智也が色を読む力を有していることを知っているのか。それについてはどうしても知りたいと思った。

駅とは反対方向に歩き出したのでタクシーにでも乗り込むのかと思ったら、競馬場から少し歩いた場所にあるコインパーキングに車を停めていたらしく、ビルとビルの間に設置されたパーキングの前で立ち止まった。

「ほら、乗れよ」

そう言うと同時に智也に向かって車のキーを投げる。とつさにキヤッチしたものの、智也はわけがわからなかった。だいたい、生命の宿らないものの色を見分けることなどできないのだ。

パーキングは満車で5台の車が並んでいた。車と黒川を交互に見比べながら、どれが似合うか似合わないかという当てずっぽうでいくしかない、と思ったところで黒川が笑いだす。

「ロック解除のボタン押せば、車のほうからここですよーって教えてくれんだろうが」

智也の手からキーを取り戻すと、キーについているボタンをワンブッシュする。真ん中に駐車されていた白のハイブリッドカーのライトが点滅した。

にやりと笑いながら「ほらな」と目で示して見せる。

「からかわないでください」

「からかってなんかいいさ。ちょっと確かめたかっただけ。さ、行く」

確かめるって、だから何を……と言おうとした智也の目の前で助手席のドアが開いた。

「どうぞ」

まるでエスコートをするように、黒川がドアを開けていたのだ。

こんなことをしてもらったことがないので、少しどきつとしてしまった。

車は静かに走り出す。運転席の黒川をちらりと見ると、意外と精悍な顔つきをしていることに気が付く。どちらかというと二重の目は優しげな印象を与えるのに、その上の一筆走らせたようなスツと持ち上がった眉が顔を引き締めているのかもしれない。鼻筋もおつていて、やや薄めの唇はとても形がいい。全体的にシャープなのに、先ほど笑ったときに見えた右の口元のえくぼがなかなか似合っていた。

「なんだ、俺の顔になんか書いてあるのか」

急に指摘されて、そんなに見つめていたのかと恥ずかしくなる。世の男たちが行き交う女性の顔やスタイルをついついチェックしてしまうように、智也は同性の容姿を無意識に見てしまうことがよくあった。

「ちよつとエロいこと考えただろう」

「！ そんなの考えていませんよ！」

とつさに否定したものの、「そんなこと言っても、ピンク混じってた」と言われて愕然とする。

ピンクっていうのは、智也が見えるという人の感情の色の中でも愛欲に関する色味なのだ。普段、他人の感情の色を読み取ることができても、自分の色を読み取られたこともなければ自分自身の色が見えたこともなかったので、智也はとても驚いた。

「見えるんですか？……えつと、黒川さんも」

「見えるよ。だけど、いつでもどこでも誰彼かまわず見てるわけじゃない。そんなの、透視能力がある人間がいたとして、力使って気になる男の股間を覗いちゃいますってのと一緒にだろう。道徳的にいかななものかと思う」

「なっ……」

あまりに露骨なたとえに言葉に詰まってしまったが、その科白を胸の中で復唱してみても疑問にぶつかった。

「じゃあ、見ないこともできるってことですか？」

「あ、そっちに反応したのか。股間を覗くってほうかと思ったのに」
「……競馬場で僕らのこと見ていたんですね。確かに、僕は恋愛対象が同性です。でも、そんな風に偏見を持たれたり、からかわれたりするのは……」

「偏見なんて持ってないよ。というか、俺も同じだしな。からかったのは……悪かった。緊張で固まってるみたいだったから、リラックスさせようと思ったんだ。すまない」

「え……」

黒川の発言はすべてに驚かされる。というか爆弾発言が多くて、どこから切り返したらよいのか迷ってしまう。何から聞こうか迷って、あ……とか、う……とかでつまづいていた智也を横目に、「これからゆっくり何でも話してやるから」と、余裕の態度で黒川は言うのだった。横顔だったけれど、その表情は穏やかなものだったし、内容はいかなものかと思うが、砕けた話題を振ってくれたおかげで、ガチガチに警戒していた智也の心はほんのり溶けてきたようであつた。

しばらくして車は細長いビルの地下駐車場へと入っていった。

「着いたぞ」

とてもマンションには見えなかったが、ここが自宅なのだろうか。智也は黒川に促されるように車を降りて後に続いた。地下1階の駐車場からエレベーターに乗り込むと、各階のボタン脇に内科や歯科、耳鼻科に皮膚科などといった医療機関名が書かれていた。

「ここは医療ビルだから、いくつかの医院と物置部屋くらいしかないんだ」

説明しながら黒川が最上階の6階のボタンを押した。脇には【もえぎクリニク】とだけ書かれている。名前だけでは診療科目はわからないが、いったいどうしてクリニクへいくのだろうか。

「なんで病院に行く必要があるんですか。話をするんじゃないんですか」

「するさ、話。ほら、降りて」

6階に到着してエレベーターのドアは開いたものの、廊下は真っ暗だった。

「今日は日曜だからどの階も真っ暗だ。こっち来て」

黒川はポケットを探ると鍵を取出し、目の前の扉を開けた。窓が大きくとつてあるせいで、電気をつけずとも中はとても明るかった。受付らしいカウンターは見当たらず、使い込まれた味のあるダークブラウンのソファセットに、ガラスの天板のセンターテーブル。バルーン式のスタイルカーテンはレースではなく麻を使用しているらしく陽光を優しく迎え入れていた。室内のいたるところに観葉植物が置かれ、病院というよりはまるで外国の屋敷のラウンジのような雰囲気だ。

物珍しそうにあたりを見回す智也と対照的に、勝手知ったるなんとやらという態度で黒川は照明をつけていく。明かりは蛍光灯では

なく、白熱灯だった。

「あの……」

「ああ、ここは俺のクリニックだ。どこで話してもいいんだが、どこが気に入るか見てみるか」

「え？ 黒川さん、お医者さんなんですか？」

「そう。言つてなかったっけ」

「聞いてませんよ！」

「あ、そうか。免許だけ見せたんだっただな。ここになら、ほら、そこに医師免許も掲示してあるだろ」

そう言われ指差された場所を見ると、デザインも大きさもばらばらの額絵に混じって賞状のような医師免許が掲げられていた。

「本当にお医者さんなんだ。え、でもこっつて何科？ そういつの書いてなかったし……」

「まあまあ、俺のことはあとで話すよ。それより、俺は君の名前すら教えてもらってないんだけど？ 今日とはとりあえずここでいいか。座つてて。紅茶は飲めるか？」

「はい、飲めます。えっと、僕の名前は、」

「だからちよつと待つててよ。焦らなくても時間はたっぷりある。

……俺はだけど。ははは」

黒川は奥の部屋へと消えていき、手持無沙汰になった智也はソファに身体を沈めた。長い間、大切に手入れをされて使われてきた皮の風合いがとても気持ちがよかった。しばらくして、湯気のたちのぼるティーカップを持って黒川が戻ってきた。

「じゃあ、名前を聞いてもいいかな？」

紅茶をひとくちすすりながら、黒川が問いかける。

「僕は青山智也といいます」

「ふうん、やっぱりね」

「やっぱり？ どういう意味ですか？」

「俺の名前は黒川基だ。何か気づいたことは？」

「え？」

智也はしばらく考えてみて、「あ、山と川ってことですか？」とひらめいたままを口にする。

「そっちか。君……青山君はいつもちよっとずれてる。まあ、そんなところもいいけど。色だよ。苗字に色が入っているんだよ」

言われてみれば、確かに青山には青、黒川には黒という色が入っている。だけど、そんなことを言ったら、世の中には苗字に色が入っている人なんてゴマンといるはずだ。それらの人すべてが、この力を有しているというのだろうか。

「さっき一緒にいた男は青山君とそういう仲なのか」

今度はまるで違う質問を投げかけられて返答に詰まったが、質問の意味を理解して顔が紅潮する。

「答えたくないなら言葉にしなくてもいいよ。色でわかるから」
「！」

「あれ、恋人じゃないのか？ セフレとか？ ……あ、ごめん。そんな沈まないで」

黒川は智也から出ている色を見て、ひとりで会話を続けてしまう。

「ジュンは……あ、さっき一緒にいた彼は恋人です」

「……そうか。彼のことが好きなのか」

「もちろんです。恋人ですから」

「俺はどうだ？」

「は？」

「俺はタイプじゃないかって聞いてるんだ。あのチャラ男とは見た目も内容も全然違うとは思うが」

「そんなことつ。いきなり言われても……」

黒川がソファを立ち智也の横にドカッと腰を下ろすと、前触れもなく肩を抱き耳元に顔を寄せた。

「俺のそばにいろよ」

「なっ、なに……」

そのあとは言葉がなく、黒川の腕に包まれたのがわかった。温かい。そうだ、人のぬくもりはこんなに温かいのだ。最近、忘れかけ

ていたぬくもり。無意識にすがりつきそうになって、智也は我に返る。

「や、やめてください。僕にはちゃんと相手がいるし、そういうつもりでここへ呼んだのなら、僕はもう帰ります」

両腕で黒川の胸を押し返すようにして身体を離す。

「……すまない。君とそうなれたらいいと思っっていることは本心だから隠さない。でも、きちんと話したい。ずっと探してきたんだ」
「探すって？ 僕を？」

「正確には条件を満たす唯一の人、だな。どうやらそれが青山君らしいんだけど。なのに君にはもうパートナーがいるっていうんだから、まいったな」

速まる鼓動が治まらない智也がうつむいていると、「お茶を入れなおしてくるよ」と言っただけで黒川が席をはずした。恋人がいるのに、ほかの男の腕に抱かれてどきどきしているなんて、しかも嫌じゃなかったという事実が智也の心を揺さぶっていた。

戻ってきた黒川は理科の実験道具のようなものを抱えていた。

「珈琲は飲める？」

智也は黙ったまま頷く。

「じゃあ、これで淹れようか。サイフォン。喫茶店とかで見たことない？ 青山君は若いから、あまりこういうのがある喫茶店は行かないかな」

きつと気まづくなった雰囲気を感じてくれたのであろう。

黒川がアルコールランプに火を灯すと、次第にコポコポとした音がしてくる。挽いた珈琲を入れたガラスをセットすると、しばらくして湧いた湯が上へのぼっていく様子はまるで実験のようだった。しばらくして黒川が珈琲と湯をかきまぜ始めると、部屋中に深い珈琲の香りがいきわたる。

「色や匂いって、すごいと思わないか。なんの言葉もなくとも、人の心を動かせるんだ」

はっとして、黒川に目をやる。照れくさそうな、それでいて優し

さのこもった目をしていた。

「ここへきて、気づいたことはないか」

「え……？」

「なんでもいい。あ、俺がスケベおやじだったとかっていうのは無しだ」

思わず笑ってしまった。でも、冷静になって当たりを見回しながら考えてみる。

優しい光を取り込んでる窓には薄いグリーンのバルーンカーテン、種類も背丈も様々な観葉植物たち。額絵のモチーフはアンティークの草花や森。床はミントのような色合いのリノリウム。それらがアイボリーに近い白の壁と天井にじっくりとなじんでいる。

「緑がいっぱい」

「そうだ。緑はどういうときに見える色だ？」

「安心とか寛ぎの……」

「さすがだな。じゃあ、感情を色で読み取れる俺たちが見ている色を、今度は逆に目に見える形で見せてみたらどうなると思うか？」

「……」

「さつき、あんなことをしてしまったから、今の青山君は心穏やかじゃなくなってしまったかもしれないが。ここへ来たばかりのときはどうだった？」

「落ち着くなつて思ったけど、それは病院らしくない内装とか家具のせいかと思つてた。でも、緑。そう、緑がそうさせているのかも。湯気をくゆらせながら、黒川がふたり分の珈琲をカップに注いだ。智也は、さつき自分に告白めいたことを言っておいて、その実、何を考えているのかわからない黒川の本心を探ろうと思ったのだがそのとき初めて気が付いた。

「黒川さんの色が……見えない」

「どうして？ 見ようとして見えなかったことなんて、今まで一度もないのに」

「答えは簡単さ。見せないようにしてるだけだ。それに車の中でも言っただが、他人の色も、見る必要がないときは見ないようにもしている」

「そんなこと、できるわけない！」
力の限り否定した瞬間、一瞬にして黒川がピンク色に包まれた。

黒川は、右の口元にえくぼをつくりながら、「青山君のハダカを想像してみた」と言う。

「もつと違うことで証明すればいいじゃないですか。よりもよつて、なんで僕の……」

「きれいな肌をしている。さぞかし服の下もきれいな身体なんだろう」

「もう！ わかりました。恥ずかしくなるからやめてください！」
今度は一瞬にして黒川から色が消え、満足したような表情だけが残る。色と言葉で詰め寄られるのは、なんともエロティックだ。まして、それが意図的なものだから始末が悪い。

「知りたいか」

「もちろんです。こんな力……捨てられるものなら捨てたい、です」
「じゃあ、俺のそばにいろ」

「どうしてそうなるんですか」

「俺たちは一緒にいるべきだからだ」

「もつと具体的に、わかりやすく教えてください。僕は黒川さんみたいに仲間がいたりしないし、こんな風に力について話すのだって初めてなんです」

「力があるぶん、強い色を放つんだな。水色で湿りそうになってるぞ」

「……！ 見ないこともできるんだったら、見ないでください！」

水色は不安や焦燥の類の感情を表す色。智也は日ごろから自分の意志とは関係なしに人の色が見えてしまっていたので、見られる側の気持ちについてなど考えたことがなかったが、人に感情を読み取られることが、これほどにも恥ずかしくて屈辱感を味わうものなのかと思い知らされた。

だけど、智也は自身の色を隠す術も、相手の色を見ないようにする術も知らない。

「教えてください。力のこと。黒川さんのこと。……僕のことも」

黒川が話した内容は、智也にとって衝撃以外の何物でもなかった。「この力をもつ者には共通点があるといったが、ひとつは名字に色が入っていること。もうひとつは、同性しか愛せないこと。そして……短命であること」

「名字と寿命については、なんとなく納得できる部分があります。でも、同性しか愛せないって、そんな共通点があるなんて信じられません」

「これは俺の予測でしかないが、たぶん繁殖を防ぐためだと思う」「繁殖？」

「そうだ。この力を持つ人間が異性と交わり子孫が誕生することになると、同じ力を有した子供が生まれるかもしれないし、同じ力を持つ男女の場合だったら純血の子供ということになる。その力は想像するだけで恐ろしい。世の中の秩序を保つために繁殖能力が制御されているんじゃないかと……まあ、これはあくまでも俺の想像だけどな。でも、青山君には男の恋人がいるようだし、俺も恋愛対象は男だったことしかない。ちなみに、俺の叔父が同じ力を持っていたんだが、やはり同性のパートナーを持っていた」

「黒川さんの叔父さんも力を？ 僕も会うことはできますか？」

「それは無理だ。叔父は10年以上前に亡くなった。……37歳だった」

珈琲はすっかり冷めていたが、智也はカップに残っていた分を一息に飲み込んだ。

かすかに手が震える。

「俺は叔父がいたおかげで、かなり救われた。色が見えることを指摘し始めた途端に母親が俺を抱きしめて、弟……つまり俺にとって

は叔父のところへ連れて行ったよ。力のコントロールも叔父に指南してもらったんだ。青山君はずっと独りだったのか」

「はい」

「……つらかったな」

わずかな間をおいて黒川がいたわりの言葉をかけたことが、智也の強固な心を崩した。

智也は震える手のひらを握りしめあい、黒川を正視した。

「物心つくところから人のまわりに色が見えました。最初は親もすごいねなんて言って笑っていたけど、だんだんと感情と色の組み合わせパターンがわかるようになってきて、親や友達の感情に合わせて言動を考えるようになってしまいました。よくあるじゃないですか、顔色ばかり窺う子みたいな。でも、それなりにうまくやれていたんです。途中までは」

「途中までは？」

「はい。うちは父が出張とか多い人で、家にいないことが多かったんですけど、ある日、僕は見えたんです。3日間出張で戻らないという父が紫色にまみれていたのを」

「紫……つまり、親父は嘘をついていたんだな」

「はい。当時、小学生だった僕は、母に言いました。お父さんは嘘をついている、と」

「……」

「普段は優しい母が形相を変えて、誰に聞いたのかと問いたただしてきました。僕は聞いたんじゃないって、嘘色が見えるって言ったと思います。その途端、母は父に詰め寄り出張の真意を確かめ、言い合いになりました。母はきつと、前から父に女の影があることに気が付いていたんだと思います。僕の目の前で、父は不倫を認め離婚を切り出しました。母は酷い罵声を浴びせ続けて、恐ろしい修羅場でしたよ。そのあとすぐに両親は離婚しました。僕があんなことを言

わなければ、あれからずっと家族でやっていけたかもしれないのに……僕が壊したんです」

「もともと壊れていたんだろ。責任を感じる必要はない」

「でも！ 僕を引き取った母は毎日のように言うようになりました。人の気持ちを盗み見て楽しいのか、と。おまえみたいな化け物がなんで生まれてきたんだろ、と。僕はっ、僕だって、生まれたくて生まれたわけじゃっ！」

最後まで言い切るまえに黒川が智也を引き寄せた。黒川の胸に顔をうずめた途端、どうしてだか泣きたくなった。

「もう、いい。何も言うな」

荒々しく引き寄せられたというのに、その腕は優しく智也を包み、大きな手のひらは、少し癖のある柔らかな智也の髪をゆっくりと梳く。

どのくらいそうしていたのだろう。黒川は唇を智也のつむじあたりに押し当てたまま腕の中に智也をとじこめている。その状態で背中をさすられ、髪を撫でられ、まるであやされているようで次第に気持ちいが和いでゆく。

「俺は慰め方をよく知らない。……キス、していいか」

遠慮がちに、でもはつきりした意志をもった声が頭の上から降ってくる。

何故、そこで黒川の身体を突き放して拒否しなかったのか。そこまでしなくとも、嫌だと言葉にすれば、きっと黒川は無理強いはしてこなかったであろう。

でも、智也はそのどちらもしなかった。そつと黒川の胸から顔を離すと、黒川の優しい瞳を見つめ、そして瞑った。

触れるか触れないかの優しいキスが降りてくる。

最初の2回は、ほんの一瞬触れただけ。

最後の1回は、相手の体温を感じられるくらいの長さで。

智也は黒川から温かいものが流れ込んでくるを感じた。薄く瞼を開くと、橙色のかたまり。そして黒川の橙色が智也をすっぽり包んでいることに気づく。人の色を見ることはあっても、その色を受け入れるという感覚は初めてだった。

橙色は愛情、慈しみの色。黒川の体温と同じく、温かい色。ずっと昔、まだ親子3人の生活がうまくいっていたころは、よく両親から感じた色。もう長いこと、見ていなかった色。

「！　なんだよ、キスの最中に目を開けるなんて趣味悪いぞ」

照れ隠しとも取れる悪態をつきながら、黒川が離れる。ただ触れ合うだけのキスだったのに、とても気持ちがよくて、離れていった黒川の唇を凝視してしまう。

「……そんなにピンク振りまいてると、襲うぞ」

「嘘！？　僕、ピンクですか！？　あれ、さっき橙色だったのに」

「俺と離れたからな。さっきは、うまく俺の色を受け取れたんだな」

「受け取るなんてことができるなんて、初めて知りました。というか、今日、黒川さんと出会って、僕は本当に世界が360度変わりました」

「360度だったら、元に戻ってきてるぞ？」

「ん？　あ、間違えました！　180度です！」

黒川はえくぼを見せながら「やっぱり抜けてるよなあ」とつぶやいた。慰めの意味でしてくれたキスとはいえ、唇を合わせたことの恥ずかしさがあつたが、黒川の変わらない態度に智也も平常心を保つことができた。

それでもふたりの距離は確実に狭まったはずで、仕切りなおして話を再開するときには、黒川は智也の隣に当然のように腰を落着けていた。

「青山君は自分の力を捨てたいと言ったけど、例えば、その力を活

かしたいと思ったことはないか。というか、活かしてるのか、あの男のために」

一瞬、何のことを言われているのかわからなかったが、それが競馬場での一件だということに行きつく。

「ああいうこと、よくやってるのか。その、ギャンブル関係で儲けたりってことだ」

「あれは……僕の本意ではないです。ジューンは競馬が好きで、一緒に出かけるといったら競馬場でした。以前、話が盛り上がりた方がいいと思って、競馬場でつい言ったんです。あの馬、勝ちそうだねって。鋭気がみなぎった色を放っていた馬でした。ジューンは馬鹿にしました。あれは一番不人気の馬だって。でも、その馬が1等になりました。それから、です。でも毎回、当たるわけじゃなくて、2位になることもあります」

強く批判されることを覚悟で話したが、予想を裏に黒川はその件に関してはその以上、何も言わなかった。その代りに、智也をみつめて話し出す。

「俺はよく叔父に言われたよ。持って生まれたからには、使ったほうがいいと思わないか、と。基^{もと}だったら、どうやって使うか、と。ガキだったから、答えられなかったな。けど、そのうちに叔父は養護教諭になった。あ、保健室の先生ってやつだ。『人は言葉にできないものをたくさん抱えて生きている。気持ちとは裏腹の言葉を語ることもある。でも、それに気づいてくれる人がひとりでもいたら、その人の負担は軽くなるだろうか』とな。って、聖人君子じみたことを言っておきながら、配属先の男子校の生徒とデキちゃったんだからな。ちゃっかりしてるよ」

「嘘っ」

「ほんと、ほんと。保健室の常連みたいな生徒ってのが、いつの時代もいるみたいなんだけどさ、そいつが本心と違うことばかり言うのが気になって、あれこれ世話を焼くようになって、ひと悶着もふた悶着もあってから恋愛関係になったそうさ。でも、まあ、そい

つとは死ぬまで愛し合う関係だったから、幸せだったんじゃないかな」

「その、叔父さんと恋人関係だった人は今は？」

「それがさ、今、スクールカウンセラーやってるんだよ。叔父の影響があつたんじゃないかな、はつきり聞いたことないけど。たまにここにも相談というか雑談にきたりするけどな。来るたびに俺に、まだ相手は見つからないのかって五月蠅くてな」

「仲いいんですね」

「気になる？ 青山君とならもつと深く仲良くしたいって思ってるけど？」

「……」

「ゴホン。で、俺も叔父の影響を受けて医者の道を選んだんだ。心療内科って聞いたことあるか？ 大々的に診療科目を掲げてないのは、患者さんへの配慮。心に風邪を引いた人は、思った以上に弱っているからな。俺は心の声を聴く医者であろうと思ってる。症状に合わせた薬を処方することは大切だ。でも、それ以上に、心を開放することが元気になるための近道だって思ってるんだ」

「それで、この力を？」

「ああ。俺のこと、カラーセラピストとか思ってる患者さんも多いんじゃないかな。ここは緑の部屋だけど、あつちに橙色と青の部屋もあるんだ。患者さんの色を見て部屋を決めたり、気分を決めてもらったりしてるんだけどな。クリニック名の【もえぎ】は春に萌える新芽の黄緑だ。暗く寒い冬を抜けて、新しい季節を迎える色でもある。ここにぴったりだろ」

エレベーターの中で【もえぎクリニック】の表示を見たときに抱いた疑問が解けてゆく。しかも、クリニック名にまで患者を想う黒川の気持ちを見たようで、智也は胸に温かいものが広がった。

「……そんな風にこの力が使えるなんて。黒川さん、すごい。お医者さんになるのだって簡単なことじゃないのに」

「見直した？」

「はい」

「努力する男っていいだろ？」

「……はい」

「惚れそう？」

「……」

「そこはノーコメントか。まあ、いいや。即否定されなかっただけ好感度は上がったと解釈しておくよ。これから徐々に、力のコントロールの仕方も俺が教えてやる。時間があるときにいつでもおいで」

「はい」

智也は、これほどまでに忌み嫌っていた力を、人のために使うことを選んだ黒川に対して尊敬の念を抱くとともに、不思議な安堵感を覚えていた。

独りではない、そう思えたのだ。

その日を機に、智也は黒川と日に一度はメールのやり取りをするようになった。やり取りとはいっても、黒川が他愛もない内容の文章を送り、それに対して智也が答える、というものだった。

ジュンとはこういう関わりはない。何気ないメールや他愛もない会話、買い物や食事をするだけのなんでもない平凡な時間を共有したことがない。気まぐれに電話をしてきて、「明日会おうぜ」と、智也の都合などお構いなしに誘うのだ。智也から誘って了解を得られたことはない。いつも仕事を理由に断られる。それでも、たまに会えば優しくされるので智也は寂しさも恋しさも、欲求のすべてを押し殺していた。

でも、黒川と日々のメールのやり取りをするようになり、その何気ない一言の往復がこれほどまでに安心感をもたらすことを知った翌日の一言が待ち遠しく思えたりもした。誰かに気にかけてもらえているという幸福感を感じたのだ。

「青山先生、おはよう！ねえ、昨日の続きの絵本、読んで」

智也はホールに飛び込んできた女の子の声に、めくりかけていた紙芝居の手をいったん止めて、彼女に声をかける。

「ゆりちゃん、おはよう。今、紙芝居読んでるから、これが終わったらね」

「えー。じゃあ、ゆりも紙芝居聞く」

女の子も紙芝居の前に座っていた子供たちにまざって、体育座りをして紙芝居をみつめる。

「よし、じゃあ、続きね」

早朝の保育園は、慌ただしい空気に満ち溢れている。

ここが智也の職場である。朝7時から9時の早朝帯と、夕方17時〜20時の夜間帯の正職員の人手が不足する時間帯の補助員という立場だ。

大学卒業後、一度は一般企業へ就職をしたものの、あまりにも入り乱れる色の洪水に耐えられなくなり体調を崩し退職した。生活のために働かなくてはならないので、何ができるかを考えたときに、思考と言動が一致する子供と接する仕事ならば、と思ったのだ。資格はなかったが、大学時代に心理学を専攻し、その中で児童心理学も学んだことが評価されて現職に就くことができた。

「先生、なんか今日の髪の毛、変だよ！」

「かつこ悪いー」

「そのエプロンも女みたいだからやめなよー」

子供というのは、本当に正直者だ。思ったことをすぐ口にする。そして裏がない。

当然、彼らから出ている色と言動はぴったりと一致するので、受ける側は安心なのだ。楽しいときも、悲しいときも、悔しいときも、怒っているときもとにかく全力なのだ。

時間給制であり、また短時間勤務のため収入は低いが、智也はこの仕事に適正を感じていた。

『明日はクリニックの休診日です。青山君の都合がよければ、また会いたい』

そんなメールが届いたのは土曜日の昼近くのこと。初めて黒川と会ってから1週間が経とうとしていた。

智也はそわそわとして気持ちになった。ジュンから誘いが来るとすれば土曜日なのだ。今週はどんなのだろうか。黒川にも会いたいと思う。会って、力のことを色々教えてもらいたい。

黒川にも予定を立てる都合があるだろうと思い、智也はジュンに会えるかどうかのお伺いのメールを送ってみる。すると、予想外にも早く返信がきた。

『無理』

そんな一言だけ。フォローも何もあつたものじゃない。

短い溜息をひとつついて、智也は黒川にメールを打ち始める。

『明日の日曜日、大丈夫です。クリニックへ行けばいいですか？
時間はどうしますか？』

黒川は昼休み中なのだろうか、これまたすぐに返信が届く。

『明日は天気がいらしい。ドライブがてら、紅葉でも見に行こう。
道が混むから、ちょっと早いけど朝7時に迎えに行く』

素っ気ない単語の羅列でもなく、形式ばった文面でもなく、心を許しあつた者同士がするようなメールの内容に、智也は心が軽くなる。先ほどのジュンからの返信とは大違いだ。

それに、紅葉を見に行くなんて、したことがあつただろうか。小中学生時代の遠足を思い出し、おやつの買い出しにでも行きたい気分になった。智也は了承のメールを送り、スーパーへと足を向けたのだった。

*

*

*

日曜日は朝から快晴だった。智也は浮足立つ気持ちを胸に、黒川の到着を待っていた。

先週、クリニックで話をしたあとに、智也の断りを押し切り自宅まで車で送られたのだが、その際に「迷わないように登録しておく」と、すかさずカーナビを操作していた黒川を思い出して、なんとなく顔が笑ってしまう。

「智也、おまちなのお客さんが来たみたいだよ」

庭の水撒きをしていた祖母が縁側から声をかける。

「おばあちゃん！ もう、僕のことはいいいから、チェックしないでよ」

「何言ってるの。智也が誰かを待って一緒にでかけるなんて、何十年ぶりのことだと思ってるの」

「おばあちゃん……僕まだ23歳なんだから、何十年は言い過ぎでしょう」

同居している祖母とそんなやりとりをしていると、玄関前に車を停めた黒川が庭へと回ってきた。

まだ7時少し前の早朝だというのに、黒川はすつきりとした表情である。先週はシャツにジャケットを羽織っていたこともあり、ややフォーマルな印象を受けたのだが、今日はゆったりしたパーカーにスリムジーンズ、足元はスニーカーというラフな格好だった。

黒川は、もともと背が高く引き締まった身体をしているので何を着ても似合ってしまうのだが、端正な顔立ちが魅力の嵩を上げていた。

「おはようございます。おばあさんまで起こしてしまいましたか。すみません。智也君と親しくさせていただいています、黒川と申します」

黒川はまず祖母に挨拶をしてから、智也のほうへ顔を向けて笑顔で「おはよう」と言った。その笑顔がさわやかすぎて、なぜか智也

のほうで恥ずかしくなる。

「おはようございます、黒川さん。今、荷物持って玄関からまわりますね」

挨拶もそこそこにその場から引つ込んでしまう。

「智也は何を恥ずかしがっているんだか。悪い子じゃないから、仲良くしてやってくださいね。本当に、よろしくお願いします」

祖母は黒川に深々と頭を下げた。

「そんな。こちらこそ、よろしく願います」

「おばあちゃん！ もう変なこと言わないでよ！ 黒川さん、混んじゃうんじゃないんですか？ 行きましょう」

黒川と祖母がまだ庭で話をしているのを見て、智也は玄関から声をかける。ふたりとも止めない限り延々と話しそうだ。

「ほんと、照れ屋ですよ。では、行ってきます」

祖母は車が見えなくなるまで、ひらひらと手を振って見送ってくれた。

「優しそうなおばあちゃんだな」

運転席の黒川は前を見ながら話しかけてくる。

「はい。両親が離婚してからずっと一緒に暮らしてきて……僕はおばあちゃんに育てられたようなものだから、ちょっと口うるさいんですけどね」

「その、嫌なら答えなくてもいいが、母親はどうしたんだ？ 青山っていうのは親父さんの名字か？ さっき表札の名前が違ったから」

「はい。青山は父の姓です。両親の離婚後、母に引き取られたんですが、僕の籍は父親の籍に残したままだったようです。母は、僕が中学に上がる前に再婚しました。再婚相手は僕を歓迎していないのは色でわかったし、母も……同じ色だったから、僕はおばあちゃんに残りました。幸い、父が大学卒業までの学費の一切を面倒みて

くれたので助かりました」

「幸せものだな」

「……え？」

一瞬、耳を疑ったくらい驚いた。大概、この手の話をすると教師でも友人でも憐みの目を向けて「可哀そう」「酷い親だ」というのが常だった。それが黒川の反応はまったく正反対のものである。

「女作って家族捨てたつてのは褒められたもんじゃないが、親父は息子である青山君のことはちゃんと愛してたつてことだろ。離婚してから養育費を払わない親つて、すごく多いんだぞ。大学までの学費つてのは、ちよつとやそつとの気持ちで出してやれる額じゃないぞ。それに、嫌な思いをして母親の新しい結婚生活についていかなくてもよかったのは、あの優しいおばあちゃんがいてくれて愛情を注いでくれたからだろ。これを幸せと呼ばずしてなんと言うか」

最後のほうは、わざと砕けた口調で誤魔化した黒川だが、うわべだけの言葉ではないことが伝わってきて、鼻の奥がツンときた。

ほんとうに黒川の言うとおりだ。父からの経済的援助と祖母の愛情は、受け取って当たり前のもものではなかったのかもしれない。今まで、そんなふう考えたことはなかったが、黒川に言われると、すんなりと受け入れられる。

「幸せものなんて初めて言われました。ちよつと嬉しい」

「もつと幸せにしてやる」

「え？」

「だから早く俺のものになれよ」

「……もう。すぐそついうこと言つんですから」

「ちえつ」

「ちえつてなんですか！ ちえつて！」

ふたりの笑い声をのせて、車は高速道路へと入った。

「黒川さん、朝ごはん食べてきました？」

「いや。途中、どっかドライブインに寄ろうかと思って。もう腹減った？」

「あの、よかつたら、おにぎり食べませんか」

「気が利くねえ。もらうもらう。悪いな。買って来てくれたの？」

「えっと、あの、作りました。いや、作ってたっていうほどのものじやなくて、炊いたご飯にちよつと塩を振って握って、海苔巻いただけだし、中身も凝ってなくて、梅干しと昆布だけで、あの」

しどろもどろになっていると、黒川はさも可笑しそうにちらりと智也を見やる。

「そんな風に説明されると、余計嬉しくなる。おばあちゃんに教わったのか？」

「……はい。なんでわかるんですか」

「普段から作ってたなら、そんな事細かに説明しないだろ。塩振ってどうか、青山君、可愛すぎる」

「もう、食べなくていいです」

「怒るなよ。そういうところも、すごくいいって褒めてるんだ」

少し目があつて、また黒川の視線は前方に移る。

ただそれだけなのに、智也の鼓動は早くなる。

「食べさせて」

「え？」

「運転中で手が離せないから。あーん」

黒川の口が大きく開かれる。仕方なく智也はおにぎりを黒川の口元へ運んでやる。がぶりと噛み取られたおにぎりは、たったの一口でもう半分近くなってしまった。なんとも男らしい一口だ。

「んーっ、この梅干し、すっぱいけど美味しいな」

「おばあちゃんが漬けた梅干しなんです。僕も大好きで。昆布のほ

うも、おばあちゃんが煮しめたやつなんですけど」

「美味しいなあ。梅食べたら、昆布もくれ。あーん」

けっこう大き目に握ってきたのに、結局、黒川は3口でおにぎりひとつを食べ終えてしまった。合間に、魔法瓶に用意してきたほうじ茶を飲ませてやりながら、昆布のおにぎりもぺろりと平らげる。

「もし嫌いじゃなかったら、おばあちゃんが朝作ってくれた玉子焼きと、金時豆の煮物があるんですけど」

「もうう！」

「あ、はい」

玉子焼きも金時豆の煮ものも智也の朝食の定番だ。炊き立てのご飯に、ほんの少しの惣菜、玉子焼きに金時豆の煮もの、そして味噌汁。智也にとつての家庭の味とは、まさにこれなのだ。

「うまいなあ」

「そんなに喜んでもらえると、なんだか僕まで嬉しいです。きつとどこかで食べるから朝ごはんはいらないって言ったら、握って持って行けって言われて。玉子焼きも詰めてくれました」

「全部うまかったけど、青山君が握ってくれたおにぎりは最高だった。ごちそうさま」

「……。おばあちゃんが、おにぎりは智也が握れって言つて。愛情は手から伝わるんだつて。あ、あの、愛情つて、変な意味じゃないですよ!？」

「そんな強く否定しなくたって。変な意味で大歓迎なのに。あ、睨むなつて。でも、おばあちゃんの言ってること、すごいわかるな。手つてパワーがすごいあるんだよ。病気や怪我で痛い思いをしたときに、手でさすってもらったことあるだろ？別に薬を擦り付けてるわけでもないのに、痛みが和らぐ気がしなかったか？『お手当て』つていうくらい、手には癒しの力があるんだ」

「へえ」

「先に食べさせてもらつて悪かったな。先は長いから、ゆっくり食べしてくれ」

「はい。ありがとうございます」

コンビニで買うおにぎりよりも、誰かに握ってもらったおにぎりが美味しいのは、そういう理由なのかもしれないな、と思う。塩加減だとか米の握り加減、具のセレクトだとか、海苔の巻き方だとか人それぞれの個性と愛情が詰まっている、最高のメニューなのかもしれない。

黒川が絶賛してくれたおにぎりを頬張りながら、また温かい気持ちになった。黒川といるといつもそうだ。特別なことをしているわけじゃないのに、その距離感や会話の温度がとても心地よい。

1時間半ほど走った後で、トイレ休憩をとることになった。入ったサービスエリアで車を降りると、その空気の冷たさに背筋が伸びる。

東京もだいぶ秋めいてきたものの、まだこの引き締まる感じはなくて、智也は薄い上着で着てしまったことを後悔した。

「けっこう寒いな。失敗したかも」

どうやら黒川も同じらしい。ホットコーヒーを飲みながら店内を冷やかしていると、「お菓子でも買つか」と黒川が言う。

「お菓子ならチョコとかスナックとか飴とかガムとか、いろいろ持ってきました」

「あのでかい荷物、朝飯だけじゃなくてお菓子がどっさりなのかよ！ 子供の遠足みたいだ」

「……おばあちゃんと同じこと言わないでください。そういうこと言つと分けてあげませんよ」

「だからけなしてないって。すぐ拗ねるんだから」

「どうせ子供っぽいです」

祖母からはいつまでたっても子供扱いされるのには慣れていたが、黒川まで同じ態度をとるのでちょっと面白くなかった。智也は黒川を残して先へ車へと戻る。もちろん、黒川が苦笑しながら後を付いてくるのは容易に想像できたけれど。

冷たい空気で、自然と足が速まる。車内へ入ろうとドアに手をかけた時に、やっと気づく。

鍵がかかっている。

それは、当然だ。車から離れるのだから、ロックしていくのが常

識であり、そして車の持ち主も運転手も黒川なのだから、鍵は黒川が持っているのだ。

振り返ると、少し離れたところから、やっぱり可笑しそうに智也を見ている。目が合った瞬間、バチンと音がしてロックが外れる。黒川が解除してくれたらしい。智也は黙って助手席に乗り込んだ。すぐに黒川も運転席へ滑り込んでくる。

「灰色まみれで怖かったから、すぐ開けた」

「もう。見ないんじゃないかなかったですか？ 僕の色は」

「だって本気で不機嫌なのか気になったんだよ。ごめん」

灰色は不機嫌や疑いの類の感情を表す色だ。黒川から見ても、それだけ灰色にまみれていたというのなら、心から不機嫌だったに違いない。

そのとき、携帯電話の音が鳴った。

「あ、僕のです」

智也が携帯電話を取り出し、モニターを確認すると『ジュン』の名前と電話番号が表示されている。

どうしようか……と、智也は戸惑った。けれど、黒川に「出なよ」と促され、通話ボタンを押した。

『トモ？ ああ、俺。やっぱ今日さ、昼間だけ暇になったんだわ。でもってさ、競輪でも行ってみねえ？』

慌てていたせいでハンズフリー状態で受けてしまったようだ。スピーカーからジュンの声が大きく響いてくる。これでは黒川に会話が丸聞こえ状態だ。しかし、戻し方がわからない。

「あ……ごめん。都合悪いって言ってたから、ちよっと出かけてて……」

『何時に帰ってくるの？ 現地集合でいいんだけどさ』

「帰りは、遅くなると思うし……。今日はちよっと……」

今日は断らなければと思うのだが、断ってしまえば、もう来週はないかもしれないという不安が智也を優柔不断にさせる。それに、

黒川が身じろぎしないで耳を澄ませているのがとても気になって仕方がない。

『え〜？ 戻ってこれねえのかよ。大した用じゃねえんだろ？なあ、トモ〜』

「……」

どうしよう、と思い、運転席の黒川をちらりと見た瞬間。

「智也。もう切れ」

突然、強い口調で黒川に言われ、胸が高鳴る。智也は慌てて、ジョンに何度も詫びながら断りを告げて電話を切った。

今までにない厳しい口調。そして、初めて呼び捨てにされた名前。ほかの人間であれば、相手がどんな感情を抱いているかをすぐに読み取ることができるので、それに合わせた対処が取れるのだが、黒川相手だとそうはいかない。ずっと色を消しているからだ。

怒っているなら謝りたい。機嫌が悪いなら話しかけず様子をみたい。

じゃあ、わからないというときは、どうしたらいいのだろう。物心つく前から「見える」ことが当然だった智也は、初めての感覚に押しつぶされそうになった。

そんな智也をよそに、黒川は押し黙ったまま車を発進させる。車内という狭い空間は、いつきに重苦しい空気でいっぱいになった。黒川に話しかけたい気もするが、また気に障ったらと思うと、迂闊に声をかけられない。

「そんなに不安そうにするな。……フェアじゃないから見せてやるけど、笑うなよ」

智也の不安の色を見たのか、そうつぶやくと黒川が潤朱色うるしいろに包まれた。潤朱色とは文字の通り潤みのある朱色で、朱をくすませ沈ませたなんとも言い難い色味だ。

潤朱色が見えると言うことは、つまり……

「え……黒川さんが、妬きもち？」

「見て確認したんなら、いちいち口に出すなよ。チツ。あー、もー、むかつく」

小さく舌打ちをしながら、心なしに黒川の顔は赤くなっているようにうだった。

「やっぱり怒ってますか」

「いや、怒ってない。むかつくだけ」

「……すみません」

「ばか、違うよ。青山君がむかつくわけじゃない。あのチャラ男がむかつくんだよ」

「ジユンですか」

「トモとかって気安く名前を呼ぶし。あげくに、帰ってこいだと？ふざけんな。誰が帰るかよ」

悪態をつきながら、黒川のまわりの潤朱色がますます濃くなっていく。嫉妬の感情が強くなった証拠だ。

「すぐ断らなくてすみませんでした。あの、よかったら黒川さんも僕のことトモって呼んでください」

「やだ」

「あ、はい」

「チャラ男と同じ呼び方するなんて、絶対やだ。智也って呼ばせろ」
「……はい」

「智也」

「はい？」

「さっそく呼んでみただけだ」

なんだかにやけてしまう。名前で呼ばれる、ただそれだけのことなのに、急に距離が縮まったような気がする。そして何故かとても照れる。

ジユンとは出会ったときにお互い名前だけしか名乗らなかったの

で、名前で呼び合っているだけなのだ。実は未だにジュンにフルネームを教えてもらっていない。なんとかして知りたいとまでは思わなかったというのは、やはり恋人を名乗るものとしては異常なのだろうか。

「俺のことも、基^{もこ}って呼べよ」

「えっ」

「そんな驚くことじゃないだろ」

「で、でも」

名前で呼べと言われて、はいそうですか、と簡単にできない。何故なら、とてつもなく恥ずかしいからだ。意識しすぎだろうか。黒川の横顔を眺めながら、名前を呼ぶシュミレーションを試みる。

さすがに年上なので、呼び捨てにはできないから、さん付けだろうか。とすれば、基さん？

「も……」

呼びかけようと試みたものの、あまりの羞恥に言いきれない。耳まで熱くなってくる。

「そんなことで照れるなよ。まずい。こっちが恥ずかしくなる」
恥ずかしいとは言いながらも、黒川はピンク色に包まれていく。

「……！ ちょっと、黒川さん、なんでピンクになるんですか！」

「……いちいち口にしないでよ。智也の恥ずかしまる色と仕草に萌えたつていうか、無意識にエロいこと考えちゃったのかな。ははは」

話の内容よりも、智也と名前を呼び捨てされることに照れる。黒川のおかげで和やかな空気に戻ったところで、黒川から色が消えてゆく。

「自分の色を消すのと、相手の色を読まないっていうのは、似ているんだ。感覚で覚えていくしかないから、時間はかかるが、必ずできるようになる」

「でも、見えないって、けっこう不安ですね。さっき、そう思いました」

「みんなそうやって生きてる。すべてが見えないから生きていけるとも言えるな。智也は見えてしまうから、知らず知らず自分を抑え込んで相手に合わせてしまっから疲れるんだ。俺といるときは、もっと自分を出せばいい。どうしても不安なら色を見せるから」

色は消えていたけれど、黒川から伝わる温かい気持ちは消えなかった。

多少の渋滞はあったものの、比較的スムーズに車は碓氷軽井沢ICを下りた。

「軽井沢に行くんですね」

「それ、今聞くんだけ？　ほんと面白いよね、智也は」

「天然じゃないです」

「まだ何も言っていないだろ」

黒川はさも可笑しそうにクツクツと笑っている。まだ、ということとは、とどのつまり、言う気だったということではないか。

「智也は今まで軽井沢に来たことあるのか」

「ないです。というか、遠足以外で遠出してたことなくて……」

「そうか。じゃあ、これから俺とたくさん行けばいい」

黒川はいつも前向きだ。同情で言葉をかけないし、自然と笑顔が浮かぶようなことをさらりと言つてのける。

「うわあ、きれい！」

「ちょうど見頃だったな」

軽井沢駅を過ぎてすぐの場所にある雲場池は、赤や黄色に染まった木々が水面に映えていた。カメラを構えた観光客も大勢いる。

「うー、でも、本当に寒いですね」

「さっき、気温6度って出てたからな。池の周りが遊歩道だから、歩けば温まるかも」

「行きたいです！」

寒さを紛らわすためというよりは、このきれいな紅葉の中を散策したいという気持ちのほうが強かった。自然が織りなす四季の色は、どうしてこれほど美しく人を魅了するのか。

赤や黄色に混じり、まだ緑の残る雑木林の遊歩道を歩く。水面に葉が落ちると波紋が生まれ、映りこんでいた色が滲む。智也は、その美しい様が気に入り、何度も足を止めては黒川に同意を求めた。1周して駐車場へ戻ってきたときには、身体は冷え切っていたが気分は高揚していた。車へ乗りこみ、エンジンをかけて車内が温まるのを待つ。

「智也の手、こんなに冷たくなっちゃって」

ふいに黒川が智也の手をとり、ハアと息をかける。吐息の温かさが、じんわりと伝わってくる。と、同時に恥ずかしさも込み上げてくる。

「……智也の恥ずかしがる顔、すごくイイんだけど、やばいんだよな」

そんなわけのわからぬことを言いながら、黒川は智也の手の甲にチュツと音を立てて軽いキスをした。

「ちよつと、黒川さん！」

「いいだろ、これくらい。今、押し倒して唇塞ぎたいくらいなんだから」

「……」

こういうときの黒川は、冗談なのか本気なのか読み取れない。でも、手の甲にキスをしただけで、黒川は離れていった。

* * *

智也は、くすぐったい気分になるような触れ合いを知らない。

就職活動をしていた1、2年ほど前に、ストレスを溜めこんでいたのと、マイノリティへの世界への興味が手伝って、初めてゲイバーを訪れた。もっと生々しい世界を想像していた智也は、店員と客のすべてが男性ということを除けば、一般的なバーとさして変りのない雰囲気にな堵したものだ。

そこで声をかけてきたのがジユンだった。飲めない酒をしこたま飲まされ、数時間後には、色を読むことができる智也でさえ正常な判断力を手放していた。

遠慮なく撫でまわしてくる男の手。耳元に落とされる卑猥な言葉と低い声。それに反応する自分の身体。

どこをどうやってそこへたどり着いたのかは、思いだすことができない。裂けるような酷い痛みで引き戻されたとき、智也の上には半裸のジユンが覆いかぶさり、獣のごとく腰を振っていたのだ。えぐられるような感覚、下腹を内側から殴打されているような鈍痛に声を上げることはおろか、まともな呼吸すら忘れた。所詮、触れ合いと言うものには程遠い即物的な行為でしかなかった。

そこから、なし崩し的にジユンとは続いている。好きだの惚れただのと言いつたことはない。ジユンの気まぐれで呼び出され、色事や賭け事につきあうか、もしくはその前後に安い居酒屋で腹を満たすか程度である。

それでも智也がジユンを恋人と定義づけたのは、即物的な行為で快樂を得る自分への詭弁にすぎないのかもしれないかなかった。

車を発進させた黒川の横顔を見つめながら、智也は思う。

もし、手の甲へキスされた瞬間に大きな声を出さなかったら……。取られた手を握り返して、そつと黒川を見つめ返したのなら……。

そんなことを考えてしまうのは、相手が黒川だからなのであろう。この、もやもやとも、じわじわともつかない不思議な胸の感覚をどう表現したらよいのだろうか。まだ手は冷え切っているはずなのに、触れられた部分が熱いとさえ感じる。

「冷えすぎたな。やっぱり何か防寒できる上着みたいなもん買うか。これから山の方にも行きたいしな」

不埒なことを考えていた智也とは裏腹に、黒川はさわやかに話しかけてきた。

「は、はい。そうですね」

「アウトレットに行ってみるか」

「はい。おまかせします」

軽井沢のアウトレットは、雲場池から軽井沢駅を挟んで、ちょうど反対側に位置していた。入場待ちの車の行列の最後尾につけて徐行するが、既に満車の看板が道路に出されている駐車場もある。

ほどなくして駐車できると、ふたり肩を並べて各ショップを見て回る。広大な敷地に、200以上ものショップが軒を連ねているというのだから見たえがある。どのショップも客でひしめきあっている。黒川と智也はアウトドア系やスポーツ系のショップを中心に見て回った。

「智也はけっこう細身だから、こんな感じが似合うんじゃないかと思うんだけど」

黒川に勧めで、フレンチアウトドアのショップへ入る。店内は、もう真冬並の品揃えだ。

すかさず女性スタッフが笑顔で声をかけてくる。

「こんにちはー。今日は何かお探しですか？」

「東京からこの格好で来たら、あまりにも寒いんで、防寒になるようなものと思ってね」

「確かにその格好だけですと寒いですよ。移動がお車でしたら、フリースなんかを1枚羽織ってもらっただけでも違いますよ。あとは、

いつそダウンですね。これから寒くなる一方ですから、東京でも使えると思いますよ」

「なるほど。じゃあ、少し店内を見せてもらいます」

「はい、ぜひー。フリースはあちらで、ダウンはこちらにそろえてありますので。ご試着もできますから、ごゆっくりどうぞー」

スタッフは終始笑顔で、流れるように説明すると、別の客のところへと移動して行った。

フリースはデザインもよかったのだが、すでに着ている服の上に着るには上着を重ねる感じで野暮ったくなってしまうし、着てきた上着を脱いで着るには薄手すぎた。

「僕、ダウンって持ってないし、この機会に買ってもいいかな。さつき試着したやつ、気に入ったし」

「ああ、さっきのやつか。ダウンだけどすっきりしててよかったよな。じゃあ、色違いでおそろいにしようか！ 智也は白っぽいやつが気に入ったんだろ？ 俺は黒にするかなあ」

「え……。おそろい？」

「ああ。平気平気。ダウンで色違いだったら、いかにもペアルックですって感じにはならないよ」

ペアルックという表現をしてしまうと恥ずかしすぎるが、実は智也は『おそろい』には憧れていた。以前、ジユンの履いていたスニーカーが恰好いいデザインだったので、同じものを買おうかなと言ったことがある。その時に「冗談だろ？ 同じの履くとか、まじキモイから勘弁」と拒絶された。

だから、黒川の一言に反応したのは、おそろいが嫌だったのではなくて、むしろ、おそろいでもいいのか？という思いだった。

智也だって、誰とでもおそろいがいい、というわけでは当然ない。やはり、それが恋人や心を許せる相手だったら……と、思ってきた

のだ。

結局、智也はオフホワイト、黒川は黒のダウンを買った。同じデザインなのだが、対極の色にしたせいか、おそろいという印象は薄い。レジで値札類のタグを切り取ってもらい、さっそく着てみる。

「智也つて、童顔だよな。俺と比べたら実際若いんだけど、白っぽいの着ると高校生くらいに見えるな」

「見えません！ 僕だって黒が似合えば黒にしたかったです」

「男臭さがあんまりないからかもな。中性的な雰囲気だもんな」

「僕は黒川さんみたいにスマートで男らしい顔に生まれたかったです。背も高くて羨ましいです」

智也も極端に低いわけではないが、黒川と会話をするときには視線が上がる。

「お、珍しく褒めたねえ。そうやって智也に上目使いしてもらえんなら、背が高いのも悪くないな。それに、智也はそのままがいいよ。俺にとっては十分魅力的だ」

まわりにたくさん買い物客がいるというのに、おかまいなしで黒川は色っぽい話を仕掛けてくる。

そこまで自分が注目されているとは思わないが、やはり周りの目というのは気になるものだ。うまくかわせず、ふくれっ面になったところで、黒川が切り替える。

「さて、防寒も完璧になったところで、そろそろ行くか」

「はい」

軽井沢が初めてだという智也のために、有名どころのスポットをめぐってくれるという。

軽井沢の鹿鳴館とも呼ばれる旧三笠ホテルを見学し、白糸の滝では焼き芋を食べながら滝まで歩いた。ひとりで1本は多いだろうと、半分に折って分け合った。焼き芋から上るほのかな湯気と、白い吐息が空に消えてゆく。

ダウンのおかげで寒さはだいぶしのげていたが、それでも冷たい空気が肌を刺す。土の道を踏みしめて歩いた先には、幅広い岩肌から白糸のように落下する滝が現れた。滝の周りには、あまり紅葉する樹木が少ないのか、静かな風景だった。

「こついうのもいいですね」

「ああ。智也もこついう場所なら、楽だろう？」

「え？」

「自然の色とか匂いとか、そういうのって浄化作用みたいなものがあるんだろうな。腹黒い欲とか憎悪とか、少なからずとも人間が抱え持つてる汚い色をかき消すだろ」

言われてみれば、人間の色が気にならないことに気づく。それぞれが感情の色を放っていることには変わりないが、どれも弱くほのかである。自然の色に負けている、というべきか。

「この感じも五感で覚えておけ。力をコントロールするのに必要だ」
「はい」

「じゃあ、次は俺の紅葉穴場スポットに連れて行ってやる。ここは人が多いからな。うっかり智也に手を出すと怒られる」

「そんなこと言って、手を出す気満々じゃないですか……」

「ははは。冗談だって、冗談」

黒川は智也の背中をポンポンと叩くと、「冗談なのかそうでないのかわからない笑みを浮かべて滝を背にした。

* * *

赤や黄色、隙間からは緑。そんな彩りのトンネルの下を歩く。

週末の軽井沢はどこもかしこも人であふれている印象だったのだが、そこを訪れたときの静けさには驚いた。あのたくさんの人たちはどこへ行ってしまったのだろうかというくらい、人の気配を感じない。黒川が言った通り、穴場であることは間違いない。

「すごくきれい……。ここ、なんていうところですか」

「野鳥の森だ。驚くほど静かだろう？　こんなにきれいなのに」

「ふたり占めですね」

「なんだって？」

「え、ふたりでいるから独り占めじゃなくて、ふたり占めかなって」
「そんな言い方初めて聞いた。智也といると新しい発見が色々あるな」

森の中なので、木々が傘となり陽も射しにくく、先ほどよりも体感温度が下がる。智也は冷たくなった両手をこすり合わせた。

「これだけ寒いと手袋が欲しくなるな。ほら、ここに入れるよ」

そう言って、黒川は自分のダウンのポケットの口を開ける。

「え、大丈夫です。自分のポケットに入れますから」

「こうしたほうが温かいんだって！」

黒川は強引に智也の右腕を掴むと、自分の着ているダウンの左ポケットに突っ込んだ。ポケットの中で、手を握られる。指と指の間に指をからませた、いわゆる恋人つなぎで。黒川のぬくもりが伝わってきた。

「誰もいないんだから、見られる心配もないさ。それに、温かいだ

る？」

「温かいけど……恥ずかしいです」

「そのウブな反応が、たまらないんだよなあ」

黒川は、えくぼを作りながら目を細めて、握った手に力を込めた。感情の色に振り回されることもなく、余計なことを考えなくていい分、気持ちが黒川に集中してしまう。

「あの……。黒川さんはこの前、条件の合う人を探してて、それが僕みたいなことを言っていましたよね。あれってどういう意味なんですか？ それに、名前に色が入ってるっていうのだって、もしも僕が母の旧姓に戻っていたら、力は消えたってことなんですか？」

「苗字については、消えるということはないと思うが、弱まった可能性はあるな。でも、どうなるかは今のところわからない。この力を持つているのは何故か男ばかりで、苗字が変わるケースはそう多くはないからな」

「女性はいないんですか？ この力を持つ人……」

「いる可能性がゼロとは言わないが、叔父からはそう聞いているし、実際、俺も出会ったことがない」

一呼吸おいて、黒川が静かに続ける。

「智也のことは、俺の一目惚れだ」

「なっ……」

ポケットの中の黒川の手に力がこもる。

「ふざけた気持ちなんかで、こんなことは言わない。俺は本気だ」

「黒川さん」

黒川が立ち止まったので、必然的に智也の足も止まる。風に揺れる木々のざわめきしか聞こえない中で、ふたりは静かに視線を合わせる。

「俺はずっとただ一人の相手を探していて、時間があるときは、人の……それも男の多い場所に行くようにしていた」

「あ、だから競馬場……」

「ああ。俺はギャブル系は特に好きでもないんだけど」

「競馬って、黒川さんのイメージと合わないって思っていたから…」

…」

「それで、俺はあの日、人混みの中で見たんだ。白に包まれた人間を。それが智也だった」

「白？ 白に包まれている人なんているんですか？」

幼少の頃より、ありとあらゆる人間の色を見てきた智也だが、ただの一度として【白色】が見える人間はいなかった。いったい何を表す色なのか。

「昔から日本では、白は太陽の光の色と言われている。つまり、俺から見て白が見える人間は、俺にとつての太陽のような存在っていう印みたいなものだ。っていうのは、表向きの説明だけだね」

「表向き？　じゃあ裏があるんですか？」

またしても意味深な笑みを浮かべながら、黒川はつないでいた手を離し、そのかわり両腕で智也を引き寄せた。そのまま、智也の瞳をじつと見つめて言う。

「貴方の色に染まりたい、のサインだよ」

言われたことを理解しようと、智也が考えるような表情をした瞬間を狙って、素早く頬へキスをした。智也の冷え切った頬に、温かい吐息と柔らかな唇の感触が、ほんの一瞬。

「あつ」

「花嫁が白無垢の着物や純白のドレスを着るのは、旦那に対して、貴方色に染めてくださいっていう意味らしいぞ。……俺も、智也を俺の色に染めたい」

ゆっくりと黒川の顔が近づいてくる。吐息がかかるくらいの距離で、黒川は顔に少し角度をつけて目を閉じる。それが何かのサインのように、智也も目を閉じた。

スローモーションのような一瞬。

唇が重なる。

それは深くつながることはせずに、掠めるように触れては離れてゆく。

智也は心もなくて、黒川の背中に腕をまわしてダウンをギュッと掴んだ。途端に、黒川から慈しみの橙色が流れ込んでくる。橙色に混じりながら、欲情のピンクや情熱の赤なども一緒に、どれも愛のある暖色ばかりが。

智也は何故だか、たまらない気持ちになる。

温かい気持ちになれているのは間違いないのだが、それ以外にも、身体の奥底のほうでチリチリするものがあるのだ。

キスの合間に、智也から甘い溜息が漏れた。

「んな顔するな。……止まらなくなる」

「そんな顔って……どんな顔してるのか……すみません」

「謝るなよ。普段のときと違って色っぽい顔するから、俺が煽られるっただけだ」

「……」

恥ずかしさのあまり、身体を離そうとしたとき、とっさに引き戻されて抱きしめられる。

「俺は、本気だから。白が見えたからとか同じ力があるからとか、そんなことじゃなくて、智也だから好きになった。智也といると、癒されるんだ」

「……僕も。僕も、黒川さんといると、安らいだ気持ちになれます」
智也を抱く腕に力がこもった。

「ありがとう。今は、それだけでも十分だ。あ、でも、そんなことを言っただけかと思うんだが、もう一度していいか」
「え？」

黒川の大きな手で、顎と頬を持ち上げられる。

今度のキスは、深く、甘く、しっとりとしていた。

そのあとは、またポケットの中で手をつなぎながら、ふたりだけの静かな森を散策した。

ジュンとこのことがあるので、迂闊なことは言っではいけないと気を張ってはみるのだが、意識が黒川に集中してしまう。なんだろうか、この温かい気持ちは。

駐車場まで戻ってくると、さすがに人が出てきたので、黒川のポケットから手を抜いて距離を取る。ほんの少し離れただけに、冷たい空気が身をまとって縮こまる。

「お昼にしようか」

「そうですね。けっこう歩いたから、お腹空きましたね」

「食べたいものとかあるか？ 好き嫌いとかは？」

「なんでも大丈夫です。子供のころからおばあちゃんに、好き嫌いしたら大きくなれないって言われて、ピーマンとか椎茸とか克服してきたのに、あまり背が伸びなかったんですけど」

「俺は、智也はそのくらいの身長でいいと思うな」

「えー、なんでですか？」

「抱きしめやすいし、キスしやすい」

「……！」

まったく、どこまで恥ずかしがらせれば気が済むというのか。頬を紅潮させた智也をよそ目に、黒川は嬉しそうな顔で先を行った。

軽井沢には、それこそちょっと歩けば出くわすというくらいお酒落なカフェやレストランが点在している。家族経営のこじんまりした店も多いようだ。今回は、その中のひとつで小さなロッジハウスのレストランに入った。「いらっしやいませ」と、優しそうな初老

の夫婦が出迎えてくれる。

二人して、奥さんのお勧めという、キノコのハンバーグにサラダとスープとライスが付いたセットを頼んだ。手ごねハンバーグはふつくらジューシーに焼きあがっていて、その上には、椎茸や舞茸、えのきにしめじといったキノコが、甘辛いソースと共に、こんもりと盛られていた。

「美味しそう！」

思わず声に出してしまつたら、奥さんも黒川も嬉しそうな顔をした。「熱いから気をつけてね」と、奥さんに言われ、「誰も取らないからゆつくり食べろ」と黒川に言われた。まるで子供扱いをされているのには、ちよつとどうかと思つたが、それよりも食欲のほうが上がつたのでおとなしく聞いておいた。

ハンバーグに添えられていた人参のグラッセとマツシユポテトが美味しくて、ペろりと食べてしまつたら、甘い人参は苦手なんだと、黒川が自分の人参を智也の皿に乗せてきた。

そんなことが恥ずかしくも嬉しい。よく、レストランなどで違うメニューを頼んだカップルが、お互いのメニューを味見しあいつこしているのをみて、羨ましいと思つたことがあつたから。

それに、誰かこういう素敵な場所で食事をするというのは初めてかもしれない、と思う。学生時代に友達はいたが、感情の色にふりまわされることに疲れてしまうので、放課後などは必要最低限の付き合いしかしてこなかったし、休日は一人で過ごすことが多かった。初めて関係を持ったジュンだって、食事といえば安い居酒屋かファーストフード店にしか入ったことがない。

食後はご主人が豆を挽いて珈琲を淹れてくれた。それをすすりながら、これからの予定について話し合う。

「このあとは、浅間山のほうまでドライブしてみるか。紅葉は終わっているかもしれないけど、牧場があつて、ソフトクリームがうまかつた記憶がある」

「へえ。僕、ソフトクリーム好きです。黒川さん、前に誰かと来たことがあるんですか？」

「ああ。高校に入るくらいまでは、毎年、家族旅行で来てたんだ」

「家族旅行……いいな」

「何、しよげた顔してるんだ。智也はこれから俺とどこへだって行けばいいだろう？」

そう言われて、嬉しいのか悲しいのかよくわからない気持ちになつて、うまく笑えた自信はなかったけれど、大きく頷いて答えた。

智也は運転免許を持っていないので、ドライブというのも珍しい経験のひとつだった。寒いので窓は閉めているが、目の前の道路と、流れてゆく横の風景とのバランスが面白かった。

なにより、誰かの視線や色に邪魔されることなく、黒川との時間をもてることが心地よかった。

浅間山に近づくにつれて、景色はどんどん寂しいものになる。標高が高いのか、紅葉も見頃は終わった感じで枯れ木が目立ちはじめていた。しばらくして、車は浅間山麓の浅間牧場に止まった。たくさんさんの牛が放牧されていて、のどかな風景である。

「ほら、しばらくたて牛乳とかソフトクリームって旗がひらめいてる」
「本当だ。さっきお昼御馳走になっちゃったから、僕が奢りますね！」

「おい、走らなくてもいいってば」

黒川は何でも気が利いて先回りしてしまうので、昼食代も知らぬうちに支払っていたのだ。高速代やガソリン代はあとで割り勘にしてもらうとしても、奢らねばなしというのも申し訳ない。

「はい、黒川さん。美味しそうですよ」

「ありがとうございます」

ソフトクリームを2つ買い、牧場内を歩きながら食べる。

「すごい濃厚ですね。ミルクって感じがすごいです！」

「ミルクって感じ、ね」

くつくと笑いながら、黒川が目を細める。別に変なこととは言っていないはずなのに、黒川はよく智也の言動を可笑しそうに見ているのだ。

「あ、黒川さん、食べるの早いですね」

まだコーンよりソフトクリームがだいぶ飛び出た状態の智也に比べて、黒川はコーン部分しか見えず、今まさにコーンを齧るうかと

いう状態である。

「智也は遅いな。そんなペロペロ舐めてたんじゃ減らないだろう」

「味わってるからいいんです！ 黒川さんは、ペロリのバクッだから一気に減るんですよ！」

「ペロリのバクッ……うん、得意かな。まあ、智也のペロペロもいいけど」

「……いったい何の話ですか？」

「わかってるくせに」

ツン、と人差し指で頬をつつかれる。その指先からピンクが流れ込んできて、智也のほっぺが真っ赤になったのは言うまでもない。

楽しい時間というのは、どうしてこんなにあっという間に過ぎ去ってしまふのだろ。本当に同じリズムで時は刻まれているのだろうか、疑いたくなってしまう。

帰りにもう一度アウトレットに寄って、祖母への土産などを買った。牛蒡ごぼうのたまり醤油漬けや、手作り芋蒟蒻を買っていたら、「渋すぎる」と黒川に言われた。そんな黒川は洋菓子系の土産をいくつか買っていた。いったい誰に渡すのだろうか。

帰りは高速道路で渋滞をしている箇所がいくつかあった。徐行運転になるたびに、黒川の左手が伸びてきて智也の右手を包んだ。黒川は自身の色を消しているの、沈黙されると本当に静かな空間になる。朝のうちは、その色の見えない沈黙が怖かったのに、今は穏やかで心地よいとすら感じている。

「智也」

突然、沈黙をやぶって黒川が呼んだ。

「はい？」

「何度もしつこいかもしれないけど、俺は本気だから。認めたくないけど、智也には付き合ってる奴がいるから今は待つ」

「黒川さん……」

「考えてくれる余地はあると思っていいか？」

「……はい」

ジュンとの関係をはっきりさせるといふのは、今まで避けてきたことだったが、黒川の言葉を受けて、いよいよ白黒つけなければと思った。

夜8時近くになってようやく智也の自宅へ到着した。途中で祖母

に電話をしたときに、黒川の分も含めてすでに夕食の準備をしているとのことだったので、家路を急いだのだ。

「おばあちゃん、ただいま！ 夕飯遅くなっちゃってごめんね」

「ただいま戻りました。途中、渋滞で遅くなってしまうって申し訳ありません」

「おかえり。二人して帰宅するなり謝る必要なんてないよ。早く手を洗ってらっしゃいな」

笑顔で出迎えてくれた祖母に一言ずつ詫びてから、手洗いうがいをして食卓につく。

この家で祖母以外と食卓を囲むのは、とても久しぶりだった。その昔、両親の離婚で母方の実家であるこの家に来てから、しばらくは母も一緒に暮らしていたのだと、ふと思い出した。

紅葉がきれいだった話を祖母に聞かせながら、みんなで焼きつつく。智也の買ってきた牛蒡の漬物もさっそく並んでいる。

食後には、黒川が祖母へ買ったというチーズケーキも登場した。

「ケーキなんて食べるの、久しぶりだねえ」と、祖母も喜んだ。こういう気配りができるところが、黒川の良さなのだ。

夜10時を過ぎて祖母が風呂へ向かったタイミングで、黒川も帰ることになった。智也は外まで見送りに出た。

「黒川さん、今日はありがとうございました」

「こちらこそ。一緒にでかけられて楽しかったし、夕飯も美味しかったよ。ありがとう。ほら、冷えるし、もういいから」

確かに夜になって気温が下がり、肌寒さは増しているのだけど、帰ろうとしている黒川を見ていると離れがたい気持ちになるのだ。

「見送りたいからいいんです」

「帰って欲しくないって色が出てる」

「そんな色ありません!!」

「ちえ、バレたか。……智也、ちょっとだけ車に乗って」

「? なんですか?」

「いいから、おいで」

黒川が後部座席のドアを開けたので、促されるまま乗り込む。智也のあとに黒川も乗り込んでドアを閉めると、人通りがないことを確認してから、そっと抱きしめられた。耳元に声が落ちてくる。

「また会ってくれるか?」

コクンと頷いて答える。それを受けて、黒川の抱擁がきつくなる。

「このまま連れて帰りたい」

「……」

無言のまましばらくそうしていたが、やがて黒川の身体が離れた。一呼吸置く前に、ついばむように口づけられる。

「怒らないんだな」

「え?」

「キスしても怒らなかった。嫌じゃないってことだろ?」

「!!! 違っ」

「なんだよ、嫌だったのか？」

「嫌じゃ、ないけど……もう、黒川さん、ずるい」

恥ずかしさでうつむいて黒川のパーカーの裾を掴むと、「そういうところが好きだ」と言っで、もう一度軽いキスをした。

黒川の車を見えなくなるまで見送ってから、家に入る。祖母と入れ替わりでお風呂に入り、湯船に浸かりながら今日の出来事を思い返してみる。

とても満たされた気分で、心地が良い。触れ合う唇の感触を思い出すと、また胸の奥がチリチリとした感じになった。次はいつ会えるのかと思うと、待ち遠しいような切ない気持ちになった。

その夜は、黒川のことを考えながら、深い眠りについた。

また新しい1週間が始まった。

朝の保育補助の仕事を終えて、智也はいったん自宅に戻っていた。昼食まではまだ時間があるので、帰りがけに買ってきたアルバイト情報誌を眺める。

今の保育園での仕事は短時間且つアルバイトでしかないの、大きな収入にはならない。家賃はかからないとはいえ、祖母も年金暮らしの身分だし、それほど資産を持っているとも思えない。今まで育ててもらってきた分、今度は智也が祖母を支えていなくてはならない。思っただが、色の負担が重すぎて大きな会社では精神的に勤まらない。

せめて空いている日中の時間で、なにか簡単な作業のバイトがあればいいのにと、情報誌をパラパラをめくる。できれば今の保育園のように、短時間でも毎日仕事が入ったほうが、まとまった収入になるのだが。

そのとき、ひとつの記事が目にとまった。

『クリニックの受付募集』

アットホームなクリニックで働きませんか？

勤務時間／9：30～16：30（クリニックは19時まで診療。
フルタイム希望の場合は応相談）

給与／ 円以上（能力に応じて相談）

休日／木曜午後・日曜・祝日（その他：夏季と年末年始、有給休暇あり）

採用条件／性別年齢・経験不問。人柄重視の採用です。

一言／産休に入るスタッフの引継ぎをお願いします。家庭の都合考慮します。

長 黒川 基

×××××医療ビル6階 もえぎクリニック

「あーっ！」

思わず声が出てしまってから、ぐいっとな顔を近づけて記事を凝視する。間違いない、黒川のクリニックの求人募集である。しかも、智也の希望する勤務内容に限りなく近い。通勤時間にしたって、あそこならば電車を使えば30分前後で通える。さすがに徒歩5分の保育園にはかなわないが、空いている日中に働くことを考えたら十分検討余地がある範囲だ。なんといっても、黒川がいる。

そこまで考えて、はっと気づく。もうすっかり黒川のところで働く気になっている自分に。

「智也、お昼御飯だよ」

祖母の呼ぶ声が聞こえて、もうそんな時間なのかと驚いた。携帯電話と求人情報誌を、交互にみつめては考えあぐねていたのだ。ひとまず、食事へと向かう。

食卓には、蕎麦と野菜のかき揚げが用意されていた。

「いただきます」

「召し上がれ」

いつもの掛け合いで食事がスタートする。

「どうしたの、智也。保育園で嫌なことでもあった？」

「え？ ないよ。どうして？」

「気もそぞろという感じだよ。色なんか見えなくなつて、おばあちゃんには隠し事、通用しないよ」

「おばあちゃん」

母親は離婚以来、智也の力を忌み嫌うようになって離れていったが、祖母だけはいつでも擁護してくれた。常に感情を読み取られることを理解したうえで、それでも智也のそばにいてることを選んでくれた唯一の人でもあった。

そんな祖母は、智也の心理状態を感じ取るのが実にうまい。今のように、ちよつとした変化を見逃さないのだ。

智也は、思い切って祖母に話してみた。

「それで智也は何に対して悩んでいるのかい？」

「え、それは、黒川さんに迷惑じゃないかなって……」

「職場の人とうまくやれるかとか、仕事が勤まるかどうかじゃなく

てかい？」

「あ、それもそうだよ。そこまで考えてなかった」

「じゃあ、受けてみなさいな」

祖母はニツコリと笑っている。

「え？」

「智也が仕事のことで悩むっていったら、今までは人間関係とか職場環境のことしか言わなかったでしょう。今回は、そのどちらも悩んでないじゃないの。そんな素晴らしいところは、他にないんじゃないのかい」

「あ……」

祖母の言う通りだ。新卒で入社した会社を退職して以来、仕事に對して何を基準にしてきたかと言えば、どんな人がいて、どんな色飛び交っているんだろうということだけだった。今回は、そういう不安は全くない。ただ、こんなうやむやな状態で黒川を頼るようなことをして、迷惑にならないだろうかという心配があるだけ。

「食べ終わったなら、早めに電話をして聞いてみなさいな。ほかの人に決まってしまうかもしれないよ」

祖母の言葉に背中を押されて、決心がついた。

「うん。そうする。おばあちゃん、ありがとう」

自室に戻って、もえぎクリニックへ電話をかけた。本当は黒川にメールでもして、求人募集について聞きたいところなのだが、変に律義で真面目な性格上、抜け駆けのような気がしてできなかった。ワンコールしただけで、応答があった。

「もえぎクリニックでございます」

「あ、えつと」

女性の声だったので、驚いてしまった。考えてみれば、黒川は診察中なのだろうし、受付の女性が出るに決まっているのに、うつかりしていた。なんて切り出そうか、あたふたしてしまったのだが、急かすようなことは言われない。

「大丈夫ですよ。今日は、ご予約のお電話でしょうか？」

ゆっくり、柔らかい声で尋ねられた。

「いえ、あの、求人募集の記事を拝見しまして。それで……」

「その件でございますね。ただいま院長へおつなぎいたしますので、少々お待ちくださいませ」

「はい」

うわ、どうしよう。院長につながって。ということは、黒川につながるということだ。ドキドキと、うるさい鼓動を感じながら、応答を待つ。

「お待たせいたしました。院長の黒川と申します。受付スタッフのご応募のお電話、ありがとうございます」

妙にかしこまった感じで黒川の声が聞こえた。

「あ、黒川さん。僕です。青山智也です」

「智也？ あれ、おかしいな。今、違う用件で電話が回ってきたはずなんだが……」

「あつてます。あの、僕が求人募集の記事を見て、それで電話しま

した」

「なんだって？」

「受付スタッフ募集って出ていたんですけど、あれは僕も面接を受けることはできるでしょうか？」

「え？　だって、智也は保育園で働いてるって言ってなかったか？」

「はい、そうなんですけど」

これまでに黒川には、保育園で働いているという話はしたもの、朝夕の補助員であることや昼間は家にいることまで説明していなかった。いいきっかけになったので、一通り現状を伝えた。

「なるほど。じゃあ、保育園の仕事をしながら、かけもちでうちの受付の仕事を考えているわけなのか」

「はい。ただ、時間的に前後ともギリギリなので、そこはご相談できれいと思うのですが」

「今日も、１７時から保育園なんだな？」

「はい」

「十分時間はあるな。今からこっちに来られるか？」

「え？　はい、大丈夫ですが、面接してもらえますか？」

「面接は今までに十分しただろ。うちのスタッフに紹介する。採用決定だ」

「ええ！？」

電車を1回乗り換えて、ドアもドアで35分。智也の家から、もえぎクリニックまでの所用時間である。

前回来た時と、打って変わって、ビルにはひっきりなしに人が出入りしている。エレベーターに乗り込み、6階を押す。6階に降り立つと、前回同様、ドアが閉まったままだった。恐る恐るドアを少しだけ開けてみる。

「こんにちは」

女性の声が飛んできて、驚いてしまう。智也は、鏡もないのに髪型を整えるふりをして、背筋をのばして院内へ入った。

「青山さんですね？」

白いナース服を着た、40代くらいの女性が笑顔で聞く。

「はい。あの、黒……院長先生に呼ばれてまいりました」

「聞いてますよ。少し待ってね、あ、来た来た」

女性がにこやかに顔を向けた方向を見ると、スーツ姿の黒川が見えた。一瞬、ドキツとしてしまった。てっきり白衣を着ているものとばかり思っていたから。黒川は、ダーク色のスーツに白地に薄いストライプの入ったドレスシャツ、襟元にはソリッドなナロータイを締めていた。すごく恰好がよくて、見惚れてしまったくらい。

だが、すぐに我に返って、普段着で来てしまったことを後悔した。

「思ったより早かったな。迷わなかったか」

「はい、大丈夫です。あの、すみません、こんな恰好で来てしまいました」

「どうして？ ああ、スーツじゃないってこと？ 全然問題ないよ。俺は仕事着と思ってスーツを着ているだけだから。それじゃあ、みんなに紹介しようか。長谷さん、柴田さんと呼んで来てもらえる？」

「はい。わかりました」

長谷さんと呼ばれた、さきほどのナース服の女性が奥へと消えて

いった。

「午後１時から２時半まではクリニックは昼休みなんだ。今日は智也を紹介するために、残ってもらっていたんだけど」

「そうだったんですか。あの、黒川さん、本当に、僕……」

話しかけた途中で、にぎやかな話声が聞こえて女性ふたりが戻ってきた。ひとりにはさっきの長谷さん。もうひとりは、はち切れんばかりのお腹を抱えた若い女性で、薄いピンクのナース服がもはやナース服には見えない状態だった。

「まず、彼を紹介しよう。青山智也君。今回、柴田さんの代わりに受付に入ってもらうことになりました。入ってもらう時期と勤務時間はこれから相談ってことで。じゃ、一言」

黒川に背中をポンと押され、促されるように一歩前に踏み出す。

「え？ あ、えっと、青山智也です。知識も経験もないんですけど、一生懸命頑張りますので、どうぞよろしくお願いします！」

深々と頭を下げると、パチパチと温かい拍手が降ってきた。みんなが笑顔で拍手をしてくれている。

「じゃあ、彼女たちを紹介しよう。白の服を着た彼女は看護師で、長谷さん。フルタイム勤務をしてくれている」

「長谷です。青山君、よろしくね。わからないことは何でも聞いてね」

「そして、ピンクの服の彼女が受付の柴田さん。見ての通り、もうじき赤ちゃんが生まれるんだ」

「柴田です。短い間になってしまっけど、引継ぎをさせてもらうので、よろしくお願いします」

「柴田さんはあと３週間ほどで産休に入るから、それまでに仕事を教わるように」

「はい。長谷さん、柴田さん、いたらぬ点が多々あるかと思っていますが、よろしく願います」

もう一度お辞儀をして頭を上げると、ふたりから温かい歓迎の色と共に、青い色が見えた。信頼の色。きつと黒川が話をしておいて

くれたに違いないけれど、それにしても全面的に信頼を向けてくれるなんて。でも、それは僕への信頼でもあるし、やはり黒川に対する絶対的な信頼が成せるものなのだろう。

まだ昼休みが1時間以上残っていたので、彼女たちは休憩に戻り、智也は黒川と共に青の部屋へ入った。窓のない壁の一面だけが深い青にペイントされていて、その前には大きな水槽があり、色とりどりの熱帯魚が泳いでいる。反対側の壁は一面本棚になっていて、書物がつまっている。そして、前には書斎デスク。中央には、やはりゆったりとしたソファ。

「診察がないときは、ほとんどここにいるんだ。智也は、もうお昼は済んだ？」

「はい、食べてきました。黒川さんは？」

「智也を呼んでから、超特急で食べたよ」

「もう、早食いは消化に悪いですよ」

「今日は特別。じゃ、珈琲を用意してくる」

部屋の外で「珈琲いれましょうか」「いいよ、やるから」というやりとりが聞こえてくる。みんな仲がいいんだな。

ソファに腰を下ろして部屋をぐるりと見回す。嫌味にならない程度に青がまとまっていて、気分が和んでくる。

「お待たせ。智也も2時半までならここにいられるんだろう？」

珈琲の乗ったトレイを持ちながら、黒川が戻ってきた。スリムで背が高い分、脚も長くて、本当にスーツがよく似合っている。やっぱり恰好いいな……と、見惚れてしまっていると、珈琲を置く黒川から再度確認される。

「智也、聞いてるか？ 時間、まだ大丈夫だろ？」

「あつ、はい、大丈夫です。4時に出れば保育園は全然間に合いますから」

「なに、ボーっとしてたんだ？」

「いえ、別に」

黒川は少しの間、じつと凝視するようにしてからニヤリと笑う。

「はーん。見えちゃった」

「えー？ な、何が見えたんですか！？ っていうか、見ないって言っただけに！」

「俺のこと、エロい目でみただろう」

「エ……エロい目でなんて見てません」

聞かれはまずいと思い、小声で答える。

「じゃあ、何考えてたんだよ」

「……スーッ、似合うなって思ってただけです」

「なんだ、俺が恰好よくって見惚れてたのか」

「……！」

「智也の得意なペロペロしてくれてもいいけど？」

「何言ってるんですか！ しませんよ！」

「冗談だよ、冗談。ほら、緊張とけただろ？」

くつくと笑う黒川は冗談とは思えない感じだったけど、緊張がとけたのは確かだった。

「じゃあ、仕事のことにについて、決めてしまおうか」

「はい」

それから30分くらいをかけて、仕事内容や勤務時間の調整などを話し合った。すでに就いている保育園の仕事を優先させる必要があったので、クリニックへの勤務は来週の月曜日から、時間は10時から16時ということで決まった。

「これは公私混同と言われても仕方ないけど、まさか智也が応募してくれるなんて思わなかった。これ以上の人材はいないよ」

「大げさです。僕は何もできないし」

「智也にしかできないことがあるだろ。長谷さんも柴田さんも、色こそ読めないけど、敏感に空気を読む人たちだ。そういうのって、すごく大事なんだよ、ここでは。いずれわかるさ」

「僕で、本当に大丈夫ですか」

「智也だから大丈夫だ」

黒川の力強い言葉に胸をなでおろしたところで、ドアがノックされた。

「黒川先生、このお菓子、青山君もどうかناと思って」

そう言いながら、長谷と柴田が入ってくる。柴田の手にはお菓子の箱がいくつかと、長谷はちゃっかりと自分たちのマグカップを持っていた。

「ちょうど仕事の話は終わったところだ。あと30分くらいあるし、みんなでお茶にしよう」

「やった。青山君、どれ食べる？ これね、先生のお土産なの。どれも美味しいよ」

「私は、このチョコのやつがいちばん美味しかったんですけど、食べてみてください」

「え、柴田ちゃん、こっちのほうが美味しいって言ってなかった？」「それと迷うんですね。長谷さんはどれが美味しかったですか？」

「うーん、私はねチーズケーキもいいんだけど、こっちの……」

目の前で繰り広げられる、女性ふたりのお菓子トークに圧倒されてしまう。もともと、姉妹もいなければ、恋愛対象も女性ではないので、なかなか女性の世界に入ることが今までなかったのだ。

「ね、ね、青山君、まずこれ食べてみて」

「次、これ食べてみてください。どっちが美味しいか」

彼女たちから手に載せられたお菓子を慌てて口に放り込む智也を、黒川は必死に笑いを堪えて見ていた。

「どうどう？ どっちが美味しい？ このクッキー美味しいでしょ？」

「チョコのほうが美味しいですよね？」

「あの……どっちも美味しいです」

「強いて言えば、どっち??」

ぎらぎらと赤く光るふたりから同時に言われて、尻込みしてしまった。美味しいお菓子の第一位を決めるのに、これほど情熱を込められるのかと驚いたのだ。

そのとき、テーブルに載せられたお菓子の山の中で、昨日、黒川が祖母へ渡したのと同じチーズケーキを発見した。智也はとっさに、そのチーズケーキを手にする。

「いただいたお菓子、どっちも美味しかったですけど、僕はチーズケーキが好きなので、一番はこれにします！」

「ええー!」

不満そうな二人の声がかぶった横で、黒川だけが楽しそうに珈琲をすすっていた。

翌週から始まったクリニック受付の仕事は、意外にも覚えることがたくさんあり、瞬く間に1日が来ては終わっていった。

初めての1週間を終えようとする金曜日の昼休み、智也は長谷と柴田に囲まれお弁当をつついていた。女性陣はお弁当を持参しており、黒川は近くの定食屋へ食べに行くというのが昼食のスタイルで、智也としては黒川と一緒にと思ったのだが、「無駄にお金を使ってもんじゃないよ」と、祖母に弁当を持たされるため、自然と女性陣と昼食を取るかたちになっていた。

「本当に、青山君のお弁当って美味しそうですね」

柴田が智也の弁当を覗きこんで言うと、横で長谷が「ホント、ホント！」と相槌をうつ。

高校時代から使っている曲げわっぱの弁当箱には、いつもの玉子焼きに鮭の西京焼き、いんげんの胡麻和え、青のりをまぶした粉吹芋がきれいに詰めてあり、白米の真ん中には祖母の漬けた梅干しが乗っている。

「ありがとうございます。この歳になっても、祖母にお弁当を作ってもらってるなんて、恥ずかしいですけどね」

「いいじゃない。おばあちゃんだって、そういう仕事があったほうが生きがいになるってもんよ！」

「わあ、長谷さんが言うと、賞録ありますね！」

「ちよつと、柴田ちゃん、どついう意味よー」

「深い意味なんてないですよ」

「まあいいわ。このクリニックで最年長つてことには間違いないんだから。長谷さんの知恵袋でもやろうかしら」

「あ、それ、いいですね」

女性が二人いるだけで、とても賑やかだ。でも、その雰囲気にも

だいぶ慣れてきた。なにより、この二人は智也に関して、必要以上に干渉してこない。放たれる感情の色も言動と一致しているので、疲れることがない。

「青山君、今週は疲れたでしょう。体調は大丈夫？」

「はい。全然大丈夫です。最初は保育園との両立がうまくできなくなって思ってたんですけど、逆にめりはりがついて、とてもいい感じですよ」

「なら、よかった。もし体調悪いときとかあったらすぐ言うのよ？」

黒川先生、よく診てくれるから。それに私も看護師だしね」

「はい。ありがとうございます」

「そうそう、黒川先生、とっても優しいですから。気分が沈んでるとかでも、黒川先生と話していると、不思議と気持ちが安らぐんですよね」

「うん。柴田ちゃん、ここで働く前から黒川先生のファンだったもんね」

「えへへ。優しいし格好いいし、ファンにならない人がいたら見てみたいですよー。旦那には申し訳ないけど、黒川先生は目の保養です」

「……えっと、柴田さん、働く前からって？」

「あ、そっか」

急に長谷が口をつぐむ。でも、それを庇うようにして、柴田が笑顔で続けた。

「あのね、私、患者としてここに通っていたの。数年前なんだけどね」

「そうだったんですか」

「うん。先生と旦那のおかげで今はすっかり元気になれたんだけどね。人生、本当に色々あるもんね！」

少し暗くなった空気をぬぐいさるように、柴田が明るく言った。

そう、人生いろいろある。きっと、柴田にも心が折れる何かがあったのだろう。

ガチャ。

「あ、黒川先生が帰ってきた。こっちも早く食べて、4人でお茶しましょう！」

「はい」

「はい」

3人で食べる昼食も、その後、黒川を含めて4人で過ごすお茶の時間も、智也にとってすっかり日常の一部分になっていた。

「もうお菓子がないわね」

「ほんとですね。明日、何か持って来ようつと」

女性陣がお菓子の缶をあけながらつぶやく。智也も黒川も、食後は飲み物だけで十分なのだが、女性はそこに茶菓子が必要だと言う。そんな話をしているとき、突然ドアの向こうに人影が映った。

「まーた、甘いもん食ってんのか。だと思ったけど。はい、これ差し入れ」

皆が一斉に入り口に視線を移す。黒川と同じくらい背が高く、ネイビーのスーツをきれいに着こなしている。

「わあ、篠さん^{しん}」

「いらつしゃい、篠さん。珈琲でいいですか？」

「なんでもいいよ。お構いなくね」

女性陣はとてにこやかにその男を出迎えた。篠と呼ばれた男は、紙袋を長谷に手渡すと、堂々とした態度で入ってきて、当然のように黒川の横にどっかりと腰を下ろした。馴れ馴れしげに、黒川の肩に腕を回す。

「よお、元気か、基」

「見ての通り、元気ですよ」

「相変わらず、可愛げがねえな」

「篠さんに対して、そんなものは必要ないでしょう」

「はっ、言うねー。寂しくしてないかと思って見に来てやってるってのに」

「寂しいのは篠さんのほうでしょう」

黒川がため息に似た一息を付きながら言った。

「あながち外れてないけど、そんな風に言われると否定したくなる

な。つと、新しい子が入ったんだ？ 柴田ちゃんの代わりの子？」

急に篠の視線が智也に移る。切れ長の鋭い瞳で正視されると、言葉につまってしまうくらいの迫力があつた。

「そうなんですよお。私、再来週で産休に入らせてもらうので、今は青山君に引継ぎ中なんです」

「そういうことだ。彼は青山君。柴田さんと同じくパートタイムで来てもらっている」

「へえ。男の子を採るとは思わなかったな。俺は篠。まあ、基の兄貴みたいなもんだな。よろしく、青山君」

篠から握手をもとめる右手が差し出される。篠からは青色が放たれていて、智也に対して強い信頼を抱いていることを伝えている。長谷や柴田もそうだったように、初対面だというのにこれほどまでに信頼の念を向けてくれるというのは、それだけ黒川を信じているという証拠でもある。

智也は篠の手をとり、握手を交わした。

篠は見た目こそ険のある雰囲気醸し出しているのだが、話してしまえばとても気さくで親しみやすい男だった。特に女性陣は篠に對してかなり好意を抱いているように見えた。

休憩時間が終わり、智也と柴田は受付のある緑の部屋へと戻ったが、黒川と篠、そして長谷はそのまま話を続けているようだった。

「篠さんは、よくいらっしゃるんですか？　黒川さんのご親戚かなにかで？」

午後一番の予約患者がまだ来院しないので、柴田に話しかけてみた。

「そつか、青山君は初めてだものね。親戚ではないみたいなんだけど、親戚みたいなものだって言ってたことがあるわ。黒川先生っていつも笑顔で、誰にでも優しくして親切で、喜怒哀楽の怒と哀を見せたことがないと思わない？」

「……言われてみれば、そんな気がします」

「でしょ。でも篠さんにだけは、そういうところも見せてるみたいだから、きつととても信頼しているんだと思う。来るときは本当によく来るけど、来ないときは本当に来ないの。気まぐれさんみたい」「そうなんですネ」

「ここだけの話だけどね、長谷さん、篠さんのことが好きみたいな」

「えっ」

「しーっ」

柴田が慌てて人差し指を唇のまえに立てた。

「長谷さん美人だけど、独身で42歳じゃない？　篠さんも確か同い年くらいだし、あの二人がうまくいけばいいなって思ってるの。」

ただ、私がここに入って3年くらいなんだけど、未だ進展がないのよねえ……あ、患者さんだわ。こんにちは」

「こんにちは」

もえぎクリニックのドアを開けて入ってきたのは中学生らしき男の子だった。

「2時半からご予約の矢野さんですね。診察券をお願いします」

柴田がいつものように手際よく受付業務をすすめる中で、智也は言葉を発することも身動きをとることもできずにいた。

何故なら、その患者が絶望を表す黒に覆われていたから。

柴田が内線で黒川に来院を告げている間も、智也はその患者から目を離すことができずにいた。外見が陰鬱としているわけではない。拳動不審や視線が泳ぐといったような、精神不安定さも見て取れない。だけど、他の色をいっさい見せずに漆黒で覆われている。

「矢野さん、今日はどのお部屋にしましょうか」

電話を置いた柴田が患者に聞いた。もえぎクリニックでは、3つある診察室をこうして患者自身に選択してもらっている。

「……どこでもいいです」

変声期前なのか、まだ高い声で患者は答えた。

「じゃあ、青山君が決めてって、先生が」

「えっ、僕がですか？」

「うん、そう言われたの。ほら、お待たせするといけないから」

黒川が部屋を指定することはあったが、智也に決めさせるのはこれが初めてだった。何を考えているのか。

もう一度、患者を正視する。現実では、どんな色も上塗りして消してしまう黒だが、智也や黒川が見る「色」はそうではなかった。黒の中にも、ほのかに他の色がゆらいでいることがある。

現に、患者を取り巻く黒色の中に、智也は他の色を見た。それらの色は、寂しさ、不安、戸惑い、罪悪感などを表している。

「……オレンジの部屋で」

「矢野さん、それでは今日はオレンジの部屋に入ってもらえますか？ まっすぐ行って右側です」

「はい」

柴田が患者を部屋に誘導したあと、内線で黒川にオレンジの部屋にしたことを告げる。

「青山君も先生と同じなの？」

患者が部屋へ入った音を確認してから、柴田に聞かれた。

「え？」

「うまく説明できないけど、黒川先生って、なにか特別なものが見えてるような気がするのよね。感がいいっていうのとちょっと違うもの」

「そ、そうですね。僕は……感はいいほうだって言われますけど、それだけです」

「そっか。でも、青山君が感がいいっていうのはちゃんと見抜いているからこそ、今みたいに部屋を決めさせたんだと思うよ」

「……」

なんでこんなことをさせるのだろう、と思った。力を強くしたいわけでもないし、必要以上に使いたくないのだ。それなのに。

もやもやとした気分になりながら、あとで黒川に話をしなければ思っていた。

30分ほどの時間が経ち、先ほどの患者がオレンジの部屋から出てきた、と思ったら、そのあとから何故か篠が付き添うようにして出てきた。気が付かなかったが、黒川と一緒に診察室に入ったらしい。

受付のある緑の部屋のソファに並んで腰を下ろして、篠と患者は言葉を交わしている。知り合いなのか？

電子カルテが診察室から回ってきたので、清算の手続きをしよう
と患者名の確認をしたとき、智也の手が止まった。

患者名：矢野 愛美

思わず、ソファに座る患者に視線を動かしてしまった。

私服なので断定はできないが、ブラックウオッチのシャツに白の
Tシャツを重ね着し、だぼだぼのジーンズを腰で締め上げていると
いう格好は女子と言うよりは男子のそれだ。顔は中性的とも取れる
が、ベリーショートのは髪は男性的なカットだった。

最近男女の区別がつきにくい命名をするのも当たり前前の世の中
になってきたとはいえ、この名前は……。

「青山君？ わからないとこあった？」

柴田に声をかけられ、我に返る。

「いえ、大丈夫です」

慌てて処理をすすめ、請求書をプリントアウトした。

「矢野様」

「はい」

智也の呼びかけに応じ、矢野と篠が連れ添って受付として使用し
ている奥のテーブル席までやってきた。

「お薬は出ていませんね。では、本日のお会計は 円になりま
す」

矢野はジーンズのポケットから財布を取り出し、会計を済ませた。
その財布は、身なりとは不釣り合いともいえる、有名なネコのキャ
ラクターが描かれているものだった。

「少し元気でたか？ そうだ、これから一緒にケーキでも食ってこ
うか！」

篠が矢野に笑顔を向けて言う。

「今日は、帰ります。……また、篠先生のところ行ってもいいです
か」

「あたりまえだろう！ いつでも大歓迎！ みんなには内緒でまた
お菓子も用意しておくしさ！」

「……はい」

「んじゃ、柴田ちゃん、またね！ えーっと、青……青山君も！」
最後に少しか安堵の表情を浮かべた矢野の肩を支えながら、篠
はハイテンションのまま帰っていった。

その様子にも、矢野の見た目と名前のギャップにも、柴田はなん
ら疑問を感じていないようだった。聞いてみたいと思いつながら、
そのあとは予約患者が続き、事務や雑務をこなしているうちにタイ
ムリミットがきてしまった。

夕方の保育園は朝とはまた違った騒々しさである。お迎えの保護
者が入り乱れ、職員も正規職員が減って、智也のような臨時職員が
増える。

18時を過ぎると時間外保育枠に切り替わり、2歳児以上の対象
児童はすべてホールに集められる。泣く子もいれば、走りまわる子
もいる。だけど、みんな見たままの色を放っていて、子供の純粋さ
を思い知る。

もえぎクリニックで出会った矢野は、悲しいくらいの黒に覆われ
ていた。まだ子供ともいえる年齢なのに。

いったい、人はいつから感情を押し殺して生きるようになってし
まうのだろうか。

「お疲れ様でした」

「おつかれさま」

20時ぎりぎりに残っていた児童の保護者3人が駆け込みで迎えに来て、やっと戸締りを終えた。黒川へメールを試みようとして、歩きながら携帯を開いたと同時にメールを受信した。確認すると黒川からである。

『今夜、少しでいいので会って話せる時間をもたえないか？ 連絡ください』

ちょうど同じことを智也も考えていたので、即座にOKの返信をしようとしていったん思いとどまり、自宅へ電話をした。

「あ、おばあちゃん？ 智也だけど。今日の夕飯なに？」

「カレーにしたよ。昨日、智也が食べたいって言ってたから」

「いっぱい作った？」

「たんとあるよ」

「じゃあさ、あの、黒川さん呼んでもいいかな？」

「ああ、この間来た智也がお世話になってる人でしょ。それは歓迎しなくちゃだね」

「ありがとう。じゃあ、連絡してみる。僕はもうすぐ帰るからね」
祖母との通話を切り、黒川に夕食の誘いのメールを返す。黒川からもすぐに返信があり、有難く受けるとのことだった。

3人の食卓はやはりいいものだった。

「家庭のカレーを久しぶりに食べました。すごく美味しかったです」

「あら、独り者なの？ それならちよくちよく食べにいらっしやいな。智也もいつも黒川さんの話ばかりしてるから、来てもらえたら嬉しいでしょう」

「おばあちゃん！ 余計なこと言わないでよ」

黒川が顔を覗き込むようにしてくる。恥ずかしい。

「ええっと、おばあちゃん、血圧の薬飲んだっけね？」

「さっき飲んでたじゃない。そんなこと忘れないでよ」

「そうか、飲んだっけね。嫌だねえ、年取ると、物忘れがひどくて」

「もー、しっかりしてよ」

さして広くないダイニングが笑いに包まれた。

祖母はいつも22時に風呂に入るのが習慣になっているので、それまでテレビをみてくつろぐ。智也は祖母の淹れてくれたお茶の乗った盆を持ち、黒川を連れて2階の自室へと向かった。

「へえ、きれいにしてるんだな」

物珍しそうに黒川が部屋を見回す。畳敷きの6畳間に学生時代から使っている古びた勉強机、背丈ほどある本棚、ちいさな折り畳みテーブル。布団は押入れに閉まっているので、意外とすっきりはしているかもしれない。

「あ、お茶、どうぞ」

テーブルに盆を置き、急須から茶を注ぐ。

「智也」

「は、はい」

名前で呼ばれるのは久しぶりだった。クリニックでは長谷や柴田の手前もあつて、名字で呼ばれているから。

「そんなに緊張するなよ」

「緊張してるわけじゃ」

「じゃあ、ドキドキ？」

「……またすぐそういうこと」

湯呑を黒川の前に差し出したとき、そつと手を握られる。

「あ、お茶、冷めちゃうから」

「今飲んだら、確実に口の中、火傷する。それとも火傷したら舐めてくれるか？」

「えっ」

手を握られたままゆつくりと引き寄せられたかと思うと、そつと唇が重ねられた。久しぶりのその甘く柔らかい感触に、気持ちも心もほぐれていく。

唇で唇をつままれるように、何度も何度も……歯がゆさを感じる優しい口づけ。

そのほんのわずかな隙間から甘い吐息が零れ落ちる。黒川が身体の向きを変え、智也を包み込むように腕の中に収める。黒川の体温を感じると、とても癒される気持ちになった。

深くつながることはない口づけは、頼りなげでいてより一層甘い。静かに唇同士で触れ合いながら、コチコチという時を刻む音だけが二人を包む。

黒川が智也の髪をさらりと撫で、じれったさを残したまま距離を空けようとしたので、つい離れていく唇を追ってしまふ。すると、黒川がえくぼを作って嬉しそうな顔をした。

「キスするの好きか？」

「……」

羞恥が込み上げてくるが、素直に頷く。キス自体が好きなのかはわからないが、黒川と交わすキスは好きだった。今までこんなに甘く切ない気持ちになるキスはしたことがない。

黒川の顔が見られないでいると、前髪に軽く唇がふれた。

「俺も。好きな人とするのは気持ちがいい。たとえカレー味でも、

な」

「ぶつ。確かにそうかも」

緊張や羞恥で固まっても、すぐこうやってほぐしてくれる。

「じゃあ、お茶をもらおうかな」

「もう冷めちゃったかも。淹れなおしましょうか」

「智也、湯呑を持ってみな」

「？」

言われるままに湯呑を手にする。陶器を通してほっこりとした温かさが伝わってくる。

「どうして湯呑茶碗に持ち手がついてないのか、知らないとか？」

「え、意味があるんですか？ あっ、湯呑は和風の飲み物に使うから日本ぽい感じのデザインにしてて、マグカップは洋風の飲み物用でかっこいいデザインにするために持ち手がある！」

「くつくくく……なに、その自信たつぷりの解答。やつぱり智也はいいなあ」

「もー。人で遊ばないでください。それで意味はないなんて言ったら、」

「言ったら？」

黒川が不敵な笑みを浮かべて智也をみつめる。

「……っ、黒川先生は本当は意地悪なんですよって、長谷さんと柴田さんい言っちゃいます！」

「あははは。それいいね！ 俺たちが親密だって教えるにはちょうどいい伝え方だ」

「……………もう、本当に意地悪」

「お茶っていうのは、こっやって湯呑を持って熱すぎないのが飲み頃なんだ」

「へえ」

「もっとキスしてもいいけど、そうしたら今度こそ冷めるな」

「飲みますっ」

黒川は可笑しそうな顔で、お茶をすすった。

「それで黒川さん、話って？ 僕もちょうど話したいと思っていたんです」

「たぶん、同じことじゃないか。今日、なんで患者の部屋決めに智也にさせたのかって聞きたいんだろう？」

「はい。僕、黒川さんに言いましたよね。できることなら色は見たくないって。だからコントロールする方法を教えてくださいませんか」

コトン、と、黒川が湯呑を置いた。

「同じなんだよ」

「え？」

「使うことと使わないことっていうのは」

「……意味がわかりません」

「たとえば、薬っていうのは毒だ。別に神様が作った魔法の粉でもなんでもない。毒の中から薬になるように選別しただけであって、薬理学的にみても毒と薬は同じものなんだ」

「薬が毒？」

「言い方が悪かったな、薬は毒にもなるし、毒は薬にもなる。智也は予防接種はしたことあるか？」

「インフルエンザとか？」

「そう、そういうのもいいし、麻疹とかポリオとか色々あるだろ。あれだって別に病気になる薬なわけじゃない。感染症の原因になるウィルスの毒素を弱めたものを薬液にしている。それを接種することで免疫力を作るわけだ」

「じゃあ、病原菌をわざわざ注射してたってこと？」

「まあそういう風にとらえていい。つまり、力をコントロールするために、一時的にそれなりに力を強く使う必要がある。それを乗り越えれば、力が力を保護してくれるようになる」

「力が力を保護？」

「ああ。しばらく辛いこともあるかもしれないが、方法はそれだけだ」

黒川から語られた内容は、力を恐れる智也にとって辛いものだったが、逃げてはいけないのだと強く思わせた。

「黒川さんがそれを見てくれるんですね」

「もちろん。きついときはすぐに言ってくれればいい。まあ、色を見ればわかるけど」

「わかりました」

強く肯定すると、緊張した空気がいつきに溶けた気がした。

「今日はなんでオレンジの部屋にした？」

男の子の姿をし、女の子の名前を持った矢野の顔が思い出された。

「あの子は男の子じゃないんですね」

「どうだろう」

「え？」

「自分が男なのか女なのかの区別をつけることが当たり前できない人もいる。区別できるから悩む人もいる」

遠回しだけれど、黒川の言わんとすることはよくわかった。つまり、矢野は自分の性について見定められず、不安定な場所から落ちそうになりながら踏ん張っているのだ。

「あの子は、こっちが苦しくなるくらいの絶望に覆われていて、その中に寂しさとか不安が見えました。きっと昔の僕と同じで、愛情に飢えているのかなって思ってた……」

「だから愛情の色の部屋にしたんだな？」

「はい。いけなかったですか？」

「俺も同じ部屋を指定していたと思う」

「じゃあ」

「うん。よく本質を見ることができたな。その見据える感覚で、自分の色を消すイメージをするんだ」

自分に色が出ていることすら感覚として持ち合わせていないので、色を消すというイメージがどうしてもつかめない。でも、黒川に言われたとおり、人の色を探ってまで見る感覚を思いおこし、今度は逆にそれを消化させるイメージを浮かべる。

「不安定だけど、消えかける瞬間があるな。なかなか物覚えがいい。トレーニングすれば、うまくできるようになるだろう」

「ほんと？」

「ああ。見ることで余分な力を使うから、色を発散させないことで力を温存するようなものだ。慣れるまではどっちにも負担がかかるから、疲れると思うが」

「大丈夫」

「言うと思った。……智也、おいで」

黒川に引き寄せられ、組んだ脚の上に座る形になった。そのまま優しい抱擁と温かい色にくるまれる。

「もう一度、いいか？ カレー味だけ」

「……僕もカレー味だけ」

そんなどうでもいいような言葉だけ交わして、影が重なる。熱く

湿ったものが智也の舌に絡まると、途端にピンク色に包まれる。甘いキスに溺れながら、どちらから発散されているのかもわからなくなるくらい、情欲のピンクにまみれてゆく。

このまま肌を合わせたいという気持ちにさせられるのに、黒川の身体は決まって離れていく。

「恋人同士には、まだなれない?」

そこなのだ。ジュンとの関係を清算しないまま黒川と関係をもつということは、黒川に対して失礼でもあるし、この気持ちに泥を塗るような行為だと思わせる。

「……ごめんなさい」

「いいよ。謝らないで。待つって言ったのは俺なんだし。……じゃあ、そろそろ帰る。智也は明日も早いだろ」

「まだっ」

「え?」

「あ……まだ大丈夫だから、もうちょっと……」

何を言っているんだろうと自分でも呆れたが、つい口から出てしまった。とっさに掴んだ黒川のシャツから手を離す。

「じゃあ、智也からキスしてくれたらもうちょっといることにする」

「なにを……」

「どうする?」

黒川は本当に意地悪だ。智也は唇に口づけるそぶりをして、口元の右側にできたえくぼにキスをした。

その日は、冷たい雨が降っていた。11月の終わりに柴田が産休に入り、智也はクリニックでの勤務時間のほとんどをひとりで過ごすようになっていた。

「よく降るわね。こういう日は気分も滅入るよね。次の予約患者さん、いつも青の部屋だから、よろしくね」

「はい、わかりました」

午後一番の患者が帰ったあと、長谷とそんな会話を交わす。長谷は雨を憂鬱なものと言ったが、智也はそうではなかった。黒川と訪れた軽井沢の森でもそうだったように、雨の中では人の感情の色が薄らぐので気分が楽だった。

相変わらずジュンとは連絡が取れないまま時間だけが過ぎていた。メールをしても返信がないので、思い切って電話をしてみたが、いつも留守電に切り替わった。別れの言葉を一言添えて、もうそれで終わりにしてしまってもいいのではないかと何度も考えた。でも、もし自分がそんな風に切り捨てられたら、ということを考えて、やはり顔を合わせて話がしたかった。

黒川は2、3日に1度は智也の家で夜の食卓を囲むようになっていた。祖母を含めて3人で他愛もないことで笑い、食後の1時間くらいを智也の部屋で過ごす。そんなことが日常になりつつあった。

ドアの開く音がして、入り口に目をやる。次の患者が来たのだらうと思ったら、違った。

「久しぶり！俺のこと覚えてる？」

「あ、篠さん」

「あつたり」。覚えててくれて嬉しいな。基は診察中？」

「いえ。でも間もなく次の患者さんが……」

そう言っているそばから、予約患者がやってきた。受付を済ませ、長谷に言われていた通り青の部屋へ通す。その際に、黒川と長谷に、篠の来訪を伝える。

「30分くらい待っていてほしいとのことでした」

「じゃあ、青山君と話でもしようかな」

そう言うと、篠は受付代わりにしているテーブル席の向かい側に腰を下ろした。ここ最近、トレーニングの意味もあって、人の色を探って見るようにしていたせいで、つい篠の色も見据えてしまう。

表面上は言動と一致する情熱の赤、そして信頼の青。でも、その一方で嫉妬を表す潤朱色がところどころにじんでいた。

（どうして嫉妬……？）

篠のことは、すでに黒川から聞いていた。以前話してもらった、黒川の叔父の恋人だった人。そして、今でもその人だけを愛していると聞いている。

なのに、何故。

「もう慣れた？」

頬杖を突きながら篠が聞く。

「はい」

「基と付き合ってるの？」

「えっ？」

「いや、あいつはつきり言わないからさ」

「……」

「無言の肯定？」

どうしてそんなことを篠から聞かれるのか。戸惑いながら言い淀んでいると、篠の顔つきが急に冷めたものになった。

「同じ力があるのかもしれないけど、それだけで基のそばにいるんだったら思わせぶりの態度はやめたほうがいいんじゃない」

「思わせぶりの態度なんて……」

「じゃあ、なんではつきり答えない？ 基と付き合ってるならそう

だと言えればいいじゃないか」

「付き合っては……いません。でも、黒川さんのおかげで僕は力に對して前向きになれたし……」

目の前の篠が嫉妬の色に染まる。見てはいけないものを見てしまったような気がして目をそらす。ふうと溜息が聞こえ、続くようにして質問された。

「で？ 青山君もドイツに行くの？」

「ドイツ？ なんですとか？ 行きませんけど」

「……基が再来月からドイツに行くのは知ってるよな？」

寝耳に水である。そんな話は聞かされたことがなかった。

「いえ。聞いていません。研修か何かですか？」

「言っていないのか。じゃあ、教えていいのかな。……研究協力だよ。」

その色が見える力の。最低でも1年は帰ってこないんじゃないか？」

「……！」

「……知らなかったのか。恋人とか大切な相手だったら、普通言うけどな」

「……」

いきなり思いもよらなかったことを次々と言われて、意気地なしの心臓が思うようについてこない。手の指先が冷たくなって震える。智也はそれを力いっぱい握りこんで篠を見た。

「それは本当ですか？ でも、クリニックだって黒川さんがいなかったら……」

「大学病院時代の先輩で、信頼のおける精神科医師に話はつけてあると言ってたけどな。まあ、俺が話すのも変だから、必要なら基が話すだろ」

そんなことは何も聞かされていない。長谷は知っているのだろう。智也はざわつく胸を鎮めることができなくなっていた。けれど、追い打ちをかけるように、篠は言った。

「青山君は、基に白い色が見えたのか？」

「え」

どうして「白」のことを篠が知っているのか。力のないはずの篠が、どこまで何を知っているのか。

「基は青山君に白が見えたから近づいたんだって？」

「はい、そう言われました」

「じゃあ、白が見える相手と人生を共にすれば短命から免れるってのは本当なのかな」

「え？」

- - 篠の説明を聞いてから、そのあとはすべての音が雑音になった。

翌日も朝から雨が降っていた。アスファルトの窪みには水溜りができて、途切れることのない雨粒が幾重にも波紋を作っていた。

智也は朝の保育園での仕事を終えて、そのままクリニックへと向かう。ぼやっとながら歩いていたら、水溜りのひとつに足を踏み入れてしまい、激しく波紋を割った。跳ね返った水しぶきでコットンパンツの裾が濡れてしまった。みるみるうちに染み込んできて冷たい。

今日は木曜日なので午後は休診になる。黒川は医師会の会合や学会などが入っていることが多いのだが、それらがなくときは智也と買い物や食事などに付き合ってくれるのが常になっていた。今日も時間が取れるようであれば、ゆっくり話をしたいと思っていた。心がざわついて収まらない。

「おはようございます」

「おはよう。今日も雨で嫌だね。あら、ズボンびしょ濡れじゃない！　ちよつと待ってて。タオル持ってくるから」

「あ……」

いいですよ、と断ろうとしたのに、長谷は小走りにタオルを探しに行った。入れ替わるようにして黒川がやってくる。

「おはよう。……どうした？」

「え？」

「なにかあったのか？　天気と同じくらい水色になってる」

水色……不安の色。最近、だいぶ自分の色を出さないことができようになっけてきているようだったのに、やはり完全ではないらしい。黒川に驚かれるほど、不安の色に染まっているというのだから。「あの、黒川さん、今日の午後は学会ですか？」

「いや。今日は学会はないけど」

「じゃあ、少し時間とれますか？」

「悪い。篠さんと約束してるんだ」

「篠、さん……あ、昨日、約束してるって、」

言いかけた瞬間、長谷がタオルを手に駆け寄ってきた。

「青山君、お待たせ！ はい、早くこれで拭いて！ 風邪ひいちゃうといけないから！」

「あ、はい。すみません。ありがとうございます」

タイミングを逃して会話が途切れてしまった。黒川も長谷の前で会話を続ける気はないらしく、「じゃあ、青の部屋に入るから。今日もよろしくね」と背を向けた。

「長谷さん」

「なあに？」

「黒川先生がドイツに行くって本当ですか」

「え！？ いつ！？ 旅行で？ 全然知らない。やだ、お土産頼まなくちゃじゃない。ドイツっていったらなんだろう。バウムクーヘンだっけ？ ソーセージ？ ビール？」

申し訳ないと思いつつも、長谷の色と言動に相違がないのを確認する。混じりけのない本音の言葉だ。長谷が知らされていないだけなのか、それともドイツ行きの話自体がそもそも篠の虚言なのか。

「いえ、僕も篠さんからちよつと聞いただけで、先生には確認していないから違うかもしれません」

「篠さんが言うなら、尚更本当でしょ」

「そうなんですか？」

「そりゃそうよ。黒川先生が一番信頼してるのは篠さんだし、篠さんが一番可愛がってるのは黒川先生なんだから。あの二人の間では隠し事もないでしょうからね」

「……そうですか」

また、胸の奥がざわわする。どす黒い感情が身体の奥底から湧き上がってくるような感覚にとらわれる。

「まあ、黒川先生も彼女くらいいるだろうから、私たちには内緒で行くのもしれないわね。黙っておいてあげましょ。ねっ」

長谷は陽気に笑ったが、智也はそれに応えることができなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6308o/>

Colorful

2011年1月19日21時51分発行